

---

# 水の砂漠の魚たち

鷺生 智美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水の砂漠の魚たち

### 【NNコード】

N8874V

### 【作者名】

鶯生 智美

### 【あらすじ】

高校生の光一が目を覚ますと、辺り一面、遠浅の海が”水の砂漠”のように広がっていた。岸辺に辿りついた光一は、そこで暮らしていた少女にやや強引に勧められ、「新しい暮らし」を求める旅に出る。しかし一人の旅は、この世界を統治する帝国の中枢部で十七年前に起きた愛憎劇に決定的な影響を及ぼすことになる。帝国の平和のために光一に課された試練とは……。（完結済みの草稿があります。一章ずつ推敲して木曜日か金曜日にUPします）。

## プロローグ

ぴちゃん 。

水の音が僕の耳を叩く。

ぴちゃん ぴちゃん 。

その音は規則正しく、繰り返し僕の耳を叩き続ける。

「……っ！」

眼を覚ますと同時に、僕は反射的に手をついて頭を起こした。僕の両手は水底を這いつぶばつっていた。その水底から、3・4cm位、僕の手首の辺りの高さで、水面が波打っている。僕は上半身を起こし、両手で髪を後ろへかきあげ、濡れた顔を撫でて滴る水気を拭つた。僕は浅瀬の中に倒れていたらしい。

僕の周りには何もなかつた。首をせわしなく回してまだ見ていない方角を探すが、何も見つけることはできない。僕は果てしない水平線に360度取り囲まれていた。まるで水の砂漠の真ん中にぽつんと取り残されてしまったかのようだ。

僕は立ち上がつた。つま先で立つて遠くまで見渡す。それでも僕には薄紫の空と、ところどころ浮かぶ汚れた綿のような灰色の雲と、それを映す水面が作る水平線だけしか見えなかつた。

泣きたいのだけれど、涙を流す余裕もなく、僕はとにかく歩き出す。歩き始めれば何か局面が変わってくれることを祈りながら。けれども、状況は何一つ変わらなかつた。歩けども歩けども何も見えない。

僕の混乱は増していく。「ここはどこだ。どこへ行けばいいんだ。どうやつたら帰れるんだ。僕は走り出す。バシャバシャと足首の辺りで水が撥ねる。けれども状況は何一つ変わらない。僕は、浅い海の中に独りぼつんと立ち止まつた。

ばちやん。

僕は水底に腰を下ろした。寒くも暑くもない。何も無い。寒さや暑ささえ。あるのは、浅い海と薄紫の空だけ。僕の頭の中にも何も考えが浮かばない。いつた「ここはどこ」なのか。

誰か。ぽつりとその言葉が浮かんで僕は弾かれたように再び立ち上がつた。誰かいないのか。誰か僕に教えてくれる人はいないのか。

とにかく誰か人をさがそう。僕の心によつやく形をもつた目標ができた。ここが海なら、しかもこんなに浅いなら、そう遠くないとこには岸があるはずだ。そうきっとあるはず。僕から見えないだけで。

僕はようやく波の行方を観察できるだけの冷静さを取り戻した。波は確かに一方から来て一方へ押し寄せてくる。そうだ、この波に従つていけば岸にたどり着けるはずだ。僕はさつきまでと違つて、ちゃんと方向といつものを定めて歩き始めた。

あるのは波の方向だけではなかつた。時間の流れもちゃんとあるようだつた。薄紫色の空の端から墨のよつて黒い色が流れ出して来ている。日が沈み夜が訪れるらしい。やがて一面暗くなり、降り注ぐような星空が現れた。月はなかつた。存在しないのか隠れて見えないのかはわからない。

とにかく僕は岸へ向かって歩き続けた。眠ろうなどとはこれっぽつちも思わなかつた。波と共に歩かなければ、僕はそれ以外のことを考えないようただ足を前に動かした。一時間か一時間か、あるいはそれ以上の時間が経つていてるのに浅瀬が続くばかりで岸は見えてこない。でも、そのことも努めて考えないようにしていた。

僕の斜め後ろが明るくなつていいようだ。でも僕はそちらの方を見ない。ただ足元の波を見つめてそれと同じ方向を目指して歩いていく。空腹だとも思わなかつた。僕はただただ誰かに会いたかつた。だからひたすら歩いていく。

夜が空け切つたころ、やつと遠くに何かがあるようになつて見えた。僕は走り出した。駆けて駆けて、それが見間違いではなく陸の影であることがわかつた。だのに僕の足はそこで動くのを止めてしまつた。がくりと膝をつき、僕はまた再び海の中に崩れ落ちる。行かなくちや。行けば誰かに会えるかもしれないんだから。動かなきや。

でも、もう僕の身体は限界だった。

ぴちゃん ぴちゃん 。

僕の耳を洗う、規則正しい波の音。その音を聞きながら、僕は再び眠りの底に引きずりこまれていつた。

## 海から来た者

光一が眼をさますと、寝台の脇に長い髪の少女が座っていた。寝台の横に窓があつて彼女はそこから外を見つめていた。

横顔しか見えないけれど、その少女はとても美しかつた。ふわりと軽くウェーブの掛かつた栗色の髪。一本一本がとても細そうで動けばさらさらと音をたてそうだ。そして、それに縁取られる顔の肌は陶磁器のようなきめ細かな乳白色。高すぎない、けれどすっと筋の通つた鼻がツンと窓の外に向けられている。唇はふつくらと珊瑚色をして　でも、今は固くきつく結ばれている。

そう。彼女の顔は各パーツの一つ一つが美しくそのバランスも完璧。全体に日本人より彫が深めで、よくできた西洋人形のように可愛い。しかし、決して彼女から人形のような印象は受けないのは、彼女の表情とその瞳の色のせいだ。

彼女は口を固く引き結び、そして美しい造作の瞳にとても強い色を宿している。まるで眼前に彼女の敵があり、それと対峙しているかのような緊張感に満ちている。

そしてその瞳の色はどうみても、深い赤色なのだ。まるで赤ワインのようだ。こんな色の瞳の人間なんて見たことがない。外国人にだつて、青や緑はいてもこんな瞳の色の人なんていないだろう。いつたい君は誰。　。そう光一が訊こうとしたその時、光一の視線に気付いたのかその少女は振り向いた。そして眼光鋭く光一をしばらく値踏みするかのように見つめていた。

「元気そうじやない」

整った形の大きな皿を一つ瞬きをせると、彼女はあつさつとした口調で言い、立ち上がった。そして扉を指差す。

「じゃ、あっちの部屋で食事して。どこにも傷はないし、お腹が膨れて一晩寝れば大丈夫でしょ。それなら明日、旅に出発できるわね？」

「あ、あの……」

光一には何がなんだか分らない。今日にし耳にしているのが夢か現実かさえわからない。ただ、さつきから足がもの凄くだるい。浅い海の中を一晩掛けて歩いてきてやつと陸についたことは、今直面している事実と関係しているようだった。

で、ここはどこなのだろう。そして、この女の子は僕を助けてくれたんだろうか。それにしても、あまり僕に関心なさそうだ。敵つてわけでもなさそうだけれども。聞きたいことはいっぱいあるのに上手く質問が出ていない。光一はまどろつこじい思いでやつとこいつ口に出した。

「あのう……。ここはどこ？ 車は誰？」

「知る必要ないわ」

予想外の答えに光一は再び混乱する。

「あなたは『海から来た者』なんでしょう？」

「え？ ああ、確かに僕は海から歩いて来たけど……」

「じゃあ、良かつた」

彼女は初めて笑顔を見せた。

「私ずっと『海から来た者』に会いたい、って思つてたのよ。願いが適つてよかつたわ。さ、食事して」

光一以外にも「海から来た者」という人がそれなりの数存在するような答えで、光一は少しほつとする。それでも、まだいろんなことが分らない。ただ、この少女は光一に積極的に説明する気がなさそうだ、ということは光一にも分かつた。

「お母さん。『海からきた者』が目を覚ましたわ」

少女は扉を開けて向こうつの部屋へ、こうつ声を掛けながら出て行つてしまつた。光一も慌てて後を追つ。

隣の部屋にはカマドがあり、そのそばの机や壁にいろいろ道具がぶら下がつていて台所に該当するスペースのようだつた。部屋の中央には食卓らしい大きな机があつて、お椀にスープのようなものが入つてゐる。そして食卓の傍には女人人が立つてゐた。この女性も栗色の髪だけれども、瞳の色は常識の範疇のこげ茶色だつた。そしてやはり色が白く、外国人のよう見えた。

「お母さん。やつぱりこの子は『海から来た者』よ。海から歩いて來たつて自分で言つたもの。異世界から来た者に間違いないわ」

異世界？

彼女が光一を異世界の者だと言つなら、光一にとつてこの少女も異世界の者だ、ということになる。

光一は辺りを見回した。窓の外にはどこまでもどこまでも続いていく海。それがどこまでもどこまでも深くならず遠浅であることは

自分がよく知つてゐる。海のほかには砂浜。これも砂浜だけで人家が見当たらない。日本にこんな場所あるだろ? あつたとしてもごく限られた場所だけだろ?。

そしてこの人たちはどうみても日本人じゃない。それどころか、娘の瞳の色はどこの国の人間にも普通にはあり得ない色だ。

大体僕は日本の自宅の近くにいたはずだ。自宅から海まで三十キロ以上ある。意識を失つた理由がなんであれ、意識を取り戻したら海の中にいた、なんてことはありえない。何かとんでもない事態が生じなければこんな風に世界が変わるわけが無い。

確かに自分は異世界に来たと考える方が、そうでないと考えるより理に適つてゐる。でも……。それなら一体ここは何処なんだ? 僕はこれからどうなるんだ? 光一は、自分の頭の奥が白く冷たくなつていいくを感じ、眩暈で崩れ折れそうになるのをこらえた。

## 旅への誘い

「ともかく、食事をお食べなさいな」

母親が光一に食卓につくよう促した。

「あ、有難うござります。……でも、僕あまり食べる氣になれないです」

「きっととも動転しているのね。でも、少しでも食べれば気持ちも落ち着くかもしれないわ」

思いやりの籠った温かい口調だつた。光一が席に座ると、Jの母娘も共にテーブルについた。

味の薄いクリームシチューのよくな、乳で野菜と肉を茹でたものを口に運びながら、光一は娘の方が答えてくれなかつた質問を母親に尋ねてみた。

「あのう。Jには一体どこなんですか」

「Jは、『土の国』の『砂浜の村』よ。『煉瓦の街』から遠く離れた……。でも、『海から来た者』に意味がある答へではないでしょ」

「ええ」

確かに光一が聞きたいのはそんなことじやない。

「いい? でもJが『砂浜の村』だつてことは旅に出たら忘れてよ」

娘の方が光一に向かつて釘を刺すようになつた。

「僕は旅にでるんですか？」

「さつきから」の娘は光一と旅に出ることを前提に話を進めていく。けれども一体どこへ、何をして行く旅だとこいつのだらう。

「ええ。貴方は自分のいた世界に戻りたいでしょ？」

「それは……まあ。でも、ここはどこ……ええつと、つまり僕がいた世界とどういう関係にある場所なんでしょう？」

母親が優しげな笑みで答えてくれる。

「違う世界なのは確かなの。こちらの世界に時々貴方のよひにやつてくる人がいるわ。皆海から歩いて来るの。そして『海の源流』までさかのぼつて、そこから元の世界に帰つて行くのよ」

「帰れるんですか？ その『海の源流』ってところに行けば

「ええ、そうよ。大丈夫。帰ることはできるわ」

「帰りたいでしょ。ね？ だからあなたは私と『カウト』へ行くの」

母親の話で見えかけていたものが、娘の話でまたよくわからなくなる。『カウト』って何なんだよ。

「ナイア、この人は自分の住む世界と全く違う世界に今来たばかりで何もわからないのよ。もっと順を追つて説明しないと」

娘はナイアという名前らしい。母親はナイアに注意すると再び光一に説明を始めた。

「あなたの世界がどのようなところかわからないけれども、時々 そうね、四、五年に一度くらうと言われているわね、こちらの世

界とは違う世界から海を歩いてやつて来る人がいるそつなの。私たちはそういう人を『海から来た者』と呼んでいるわ

「はい」

「それから、さつき私はここを『土の国』といったわね。この『土の国』は、リヴィアイエ帝国に属しているの」

「リヴィアイエ帝国……」

「『海から来た者』は皇帝の住む皇都に行くより決まっているわ。皇帝も貴方たち『海から来た者』と会いたいと思つていらっしゃるから。そして、皇都にある『海の源流』から元の世界に戻ることができるの」

皇都 ナイアが言つた「カウト」とこののがいりがい。

「だから、『海から来た者』と、その者を案内する人間は、許可なく国境を越えて旅をすることができるし、その間の宿や使つた乗り物の費用も掛からないの。後から帝国府が立て替えてくれるから」つまり、僕と僕の案内人はタダで旅行が出来るといつことですか？」

「ええ

光一は初めて緊張のとれた顔をして、ナイアに向かつて言つた。

「そうか。それで、君は僕と一緒にタダで旅行がしたかったんだね」「タダ、つてだけじゃないわ。無許可でできるのが助かるの。とにかく、私も旅が出来るし、あなたもおつちへ帰れる。貴方にとっても私にとつてもいい話でしょ」

「あ……」

光一が何かを思い出した顔をした。そして少し困った顔で視線を机にさよわせ、考え込む。そして、顔を上げて、母親に真剣な声

で持ちかけた。

「あの、ハ。ここに残る、つていつ選択肢はありますか？」

母親は返す言葉が見つからない様子で、光一を驚いて見つめている。ナイアも一瞬呆けていたが、大きな声を出して言った。

「ちょっと、何それ？ あなた家に帰りたくないの？」

「家には……帰りたいけど……。元いた世界に帰りたいかと言わるど、ちょっと違うかな、って。絶対帰りたくないってわけじゃないんだけど……」

「どうしたいのよ？」

「だから……、もうひとつこの世界のことを知つて、こっちの方が良かつたら、ひに翻訳よつかなと思つんだけビ。あの……ダメですか？」

母と娘は顔を見合せた。両方の顔に困惑の表情が浮かんでいた。

## 浜辺の者

母親はしづらしく言葉を探すように沈黙した。そしてしづらしくしてから光一に尋ねた。

「貴方、お名前は？　ええと、人に名前を聞く前に私から名乗るべきね。私の名前はマイア、そしてこの娘がマイア」

「あ、どうも。僕の名前は、光一です。小林光一です」

光一は軽く頭を下げる紹介した。

「コーラー、変わったお名前ね。あくまでこちらの人間からするとだけれども。そのお名前は貴方の？」両親がつけてくれたのでしょうか？」

「はー」

「きつと愛情を込めて選んでくれた名前だと思つわ。貴方は？」両親に会いたくないの？」

「会いたい、会いたいです」

光一の目に涙が浮かぶ。でも、それよりも。

「でも、僕、学校でイジメにあつてて……。親には隠してるんです。きつと心配すると思うから。でももう僕……。もう……。僕、前から……前からこの世から消えたい、って思つことがあつたんです。だから……だから、こうなつてちょうど良かつたのかも……」

「イジメ？　何それ」

とマイアが尋ねた。

自分の受けているイジメを思い出そうとして、光一は自分の頭の奥が冷たく縮こまるのを感じた。いつものアレだ。学校の教室でクラスマート達が、まるで光一など存在しないかのように振舞うときに、光一は所在無さと同時にいつもこの頭の奥が冷えるような感じを味わう。

彼の通っている高校の教室に、彼の居場所はなかつた。

子供の世界では小学校の半ば頃から教師の見えない所で棲み分けが始まる。見た目がカッコよく、実際モテて異性との話題が絶えないグループ。学業優秀で試験での順位を気にするグループ。このグループほど優秀ではないけれど、それなりに成績も良く試験の順位も中くらい、そして成績同様何事においても無難なところに落ち着いてじつと地味に棲息しているグループ。それとは別に、自分の好きなものの世界にどっぷり入り込んで、同類たちと学校で集まっている「オタク」グループ。クラスはこういったグループに分かれていて、そして大体この順番にヒエラルキーというものが存在する。

光一はそのどれにも入ることができなかつた。中学までは、何事にも無難に振舞う地味なグループに所属していた。今彼が通つてゐる高校でもその気になつていればこのグループに所属することが出来ていたのかもしれない。

光一は高校入学と同時に東京からこの街に引っ越してきた。父親は大手企業に勤める、いわゆる「転勤族」だった。会社のことは何も話さない父だったが、今回的人事には不満があつたようで「都落ち」などという言葉を口にしたのを光一も聞いたことがある。

光一の心中にもどこかで、自分とこの街で生まれ育つた生徒とは異質なのだという気持ちがあつたのかもしれない。四月の桜の頃、

新しい制服に身を包んだこの高校の生徒たちが、生存競争でもするかのような勢いで仲間づくりをする中で、光一はどうにもそんな気になれずぼんやりと過ごしていた。

「ねえ、アドレス教えてよ」

「いいよ。お前のもな」

桜が散ると同時に、教室のそこかしこでそんな遣り取りと、ケータイを付き合わせる光景に光一は出くわした。その度に彼は自分のポケットに入っているケータイが急に重く感じられ、そして頭の奥に冷たいものを感じた。

僕にも教えてくれよ。光一がそういえばアドレスだけは教えてくれたかもしれない。けれど、そうしたところでメールが送られてきたかどうか。多分、送られることは無かつただろう。

そのうち、クラスメート達の学校の中での関係は、学校の外でのケータイを通じた交流関係の一部になってしまった。学校の中でしか彼らと顔を合わせない光一には、もう立ち入る隙は残っていなかつた。

一人ぼっちでもいいじゃないか。光一は一人ぼっちになりたい訳ではなかつたが、なつたらなつたで仕方ない、くらいに考えていた。

しかし事態は彼が思うよりもっと深刻だつた。「グループに属することができない」とは何か重大な欠陥だつたのだ。光一は単に「一人で居る人間」、ではなく「人間としての能力を欠くモノ」として扱われるようになつた。

たいていにおいて、彼はその存在を無視された。周囲のクラスメ

ート達は光一を見えない者のように扱う。彼が傍にいたって全く目もくれない。たまたま転がっている石をよけるかのように彼の横を通り過ぎる。彼らの方から話しかけることなど全く無く、彼が何か話しかけても風の音のように聞き流された。

彼は毎日、頭の奥の冷たさを持て余しながら、遠くから聞こえてくる教師の指示や始業終了のチャイムの音に無表情に従うことで、ただただ時間を潰していた。

とはいえるこの時間つぶしはなかなかの重労働で、彼はこういった日常を耐え忍ぶだけでその日のエネルギーを使い果たしてしまう。だから彼に未来について建設的なことを考へる余裕はなかった。ただぼんやりと、頭の中に絶望という言葉がちらつくだけだった。

時折、イジメらしいイジメも受けることがある。皮肉にもそれは彼を本当の絶望から少しだけ遠ざけてくれる。

クラスメート達が珍しく声を掛けってきたと思つたらそれはたいてい無理難題だ。そして光一が困つていると殴つたり蹴つたりと暴力を振るう。身体は痛い。けれども彼の胸の中に微かに喜びが起きる。それは、自分は誰にも見えない幽霊ではなかつたのだと安堵する気持ちだ

誰からも無視されていると、光一は、果たして自分という人間は存在するのだろうか、という焦燥感を感じる。ほんの時たまでも、そしてそれが悪意や蔑意でも、自分になにかしらの感情を向けられていることは、完全な無視よりも救いがあった。

でも、そんなの救いでも何でもない。救い、というのは今のようなシチュエーションのことをいうんだ。と、彼は今ナイアの家

の台所で椅子に腰掛けながら拳を握った。どうしてだかわからないが、自分は異世界に来たのだ。これはチャンスだ。

「だから、僕は……僕はこの世界がそんなに悪いといひじゃないなら、この世界に居たいんです」

光一はナイアよりも、主に温厚そうなマイアに向かつて話をしていた。ところが、先に口を開いたのはナイアの方だった。

「あなたの言つこと、私よくわかる。苛められているのって嫌よね。わかるわ。でもそれなら『砂浜の村』にいても解決しないわよ。やっぱり旅をしないと」

光一には意外な成り行きだった。この気の強そうな少女が、「イジメ」にすんなり同情してくれるとは思つていなかつた。どう見ても彼女は苛められる側ではなく、どうせかと言えば苛める側に回りそうに見える。

そうでなくとも、弱気な人間を見ると説教を 例えば、どこにだつて生きて行く限り似たようなことはある、皆辛くても我慢しているの、だからあなたも逃げちゃだめ そんな、先生や親戚のあばさんのするような説教を、高飛車に言つそつたタイプに見えたのだ。

でも、ナイアの言つているのは少し違うよつだ。そして、どうしてここでもまた「旅」が出てくるんだろう。

「あのね。この村にいたつて苛められるだけなの」

ナイアは面白くなれそつた顔で話し始めた。

「『砂浜の村』の住民は賤しいんですって。そういうことになつてるの。『煉瓦の街』なんかに行くと私たち『砂浜の村』の住人は、『浜辺の者』って呼ばれて差別される。まあ、苛められるっていうわけ」

例えば、トナイアは話を続ける。

「『煉瓦の街』の住人が歩く歩道の上を、『浜辺の者』は歩けないわ。馬車が通る道の隅っこを歩くの。あ、人も馬車も向こうは避けられないわよ。私たちは人の目に見えないことになつてるので、汚らわしいから。だから向こうからばんばん当たつて来る。痛い目に遭いたくなければ私たちの方がずっと緊張して避けなければならぬ」

い

「……」

「服もね、決まっているの。麦を運ぶ麻袋をね、一度ほどいで、頭と腕のてる袋に縫い直すの。それを被つてこうやつて紐で結ぶ。ほら

彼女は立ち上がり、全身を彼に見せた。確かにそんなつくりのみすばらしい服装だった。そして母親もまた全く同じ格好をしていた。

「それからね。この村の中にいれば差別されずに済むかっていうとそうもないかない。私と母さんは余所からの流れ者だもの。だから村からうんと離れたこんなところに住んでいるのよ。村の人たちは、必要最小限の用事のある時しか私たちに口を開かないわ。私が小さな頃、高熱で死に掛けたことがあつたけど、その時だつて村の医者は私を診てくれなかつた。それから、うちの屋根が壊れた時だつて誰も修理してくれなかつたわ。私が自分でよじ登つて穴を塞いだのよ

「…………」

光一はどう返事していいのかわからない。ナイアは氣の毒がつて欲しそうなわけでもなく、むしろ何か意気込むかのように光一に向かって話す。それがどうしてなのか彼にはわからないが、ともかく話の内容からするに、この村にいてはナイアにも光一にもあまり救いはなさそうだといつことは分った。

「私はずっと『海から来る者』を待っていたの」

彼女の赤ワイン色の瞳が強く光った。

「そして、一緒に旅に出るんだ、つて願い続けてきたの。この村を出て行くのよ。京都って随分遠くにあるもの。遠く離れたところまで行けば、誰も私のことを知らない街がある。そこに行けば、名前を変えて、『浜辺の者』であることも隠して、全く新しい人生を送ることができるわ。そう、できる。やってみせる」

彼女は光一を見て、にこりと笑った。そして光一に握手を求める。

「ねえ。私達つて似たもの同士ね」

そういうわれて光一はどぎまぎする。こんな美少女、それも氣の強そうな女の子と「似たもの同士」になるなんて。

同じクラスの女子たちにも派閥はある。もつともイジメの対象となっている光一にとつてはどのグループの女の子だつて何の縁もないけれど。もしナイアみたいな少女がクラスに居たら。彼は女子たちのヒュラルキーの頂上にいる女生徒の顔を何人か思い浮かべた。きっとあの子たちを蹴散らして女王様として君臨するに違

いない。

こんな女王様みたいな女の子が、僕のこと、「似たもの同士」なんて言つてくれる。

光一は、ぼうっとした頭でナイアの差し出した手を握つた。

「ね。だから一緒に旅をしましよう。今までの自分を知らない街で、新しい人生を生きるのよ」

ナイアの目には強い意志の力が漲つており、それを見返した光一も息を吸い込む。

「うん」

そのやつとりを見ながら、マイアは眉を顰めて思案していた。

## 旅の始まり

翌朝、光一はナイアと共に出立した。マイアとナイアの家は、外から見ると本当にみすぼらしかった。そもそもそれは住居というにはあまりにも小さく、物置小屋のようであつた。壁は煉瓦積みでできているけれども、全体に色褪せあちこち崩れかかっている。屋根も初めはちゃんと葺かれていた痕跡はあつたが、いかにも素人が穴を取りあえず塞いだ、という感じの箇所がいくつかあつた。扉も窓枠も古びてまるで廃材がくつついでいるようだ。

ナイアは自分の生まれ育つた貧しげな家を一瞥すると、ふん、と鼻息一つついた。そして見送りにてた母親に視線を向けて簡単な別れを告げる。

「それじゃあ、母さん。私行くわね」

「ええ……。気をつけてね……」

そしてぐるりと背を向けて歩き出そつとした。

「あ、あの……」

光一は立ち止まつたまま、先に歩き出したナイアの背中にたまらず声を掛けた。

「何?」

「あの、何と言つたか、もつちょつと……。あので、もしかしたらお母さんともう会えないかもしないんだが。もう少し、あの、何か言つたほうがいいんじゃないかな」

ナイアは冷ややかに光一を見、そして同じく冷ややかな視線で自分の母親を見た。それから再び光一に向けて説明した。

「昨日も言つたと思つけど、もともと母さんは『』の人間じゃないの。京都に居たのよ。それがなんでだか絶対理由を教えてくれないけど、この『砂浜の村』に流れ着いて私を産んだの。おかげで、私は『賤しい生まれ』なんてことになつてゐるし、そのうえ、その『賤しい』人達の中でも仲間はずれつてことになつちゃつてるわけ」

母親は俯く。

「どうしてこんな所で私を産んだの、つてずっと母さんを責めてきたけど、今はもういい。だつてそれは母さんの人生だもの。母さんはそうしたかつたのよね？ 好きにすればいいわ。でも私はもうたくさん。私はこれから私自身の人生を切り開くわ。ここから出て行く

く

その口調は決して母親を赦すものではなく、冷たく切り捨てるものだつた。

「最後に」

ナイアは顎を上げて母親に尋ねた。

「最後にもう一回だけ聞いておくわ。母さん、なぜ京都に住むなんて恵まれた立場を捨ててこんなところに流れてきたの」

優しい大人しげな雰囲気のマイアが、強い意志を込めた顔になつてきつぱり言つた。

「それは言わない。貴女も知らないほうがいいの」

それから複雑な表情で娘に念を押した。

「貴女、『砂浜の村』を出たら名前を変えるって言つていたわよね。私の名前にも貴女の名前にも似ていらない、全く新しい名前にするって。そう私と約束したわよね。それだけは絶対に守つて頂戴」

「ええ、もちろん。私は新しい名前を生きるわ。そうだ。新しい名前ならコーライチに付けてもらつたらいい。あっちの世界の名前をつけてもらつうの。そしたらこっちの世界では珍しい名前になるんじやない？」

「え……」

「きなり話題を振られて光一はあたふたする。マイアはちょっと寂しげな顔で頷き、そして光一に言つた。

「コーライチ、娘のことを宜しくお願ひしますね。名前の「」とも、それから旅の間のいろんなことも」

「この子より私の方がずっとしつかりしてゐるじゃない。大丈夫よ。あ、でも名前の方はよろしくね」

マイアは光一に一声掛けると、母親を無表情に見て言つた。

「それじゃ、さよなら。母さん」

そして踵を返して歩き出した。光一も慌ててついていく。

彼女の家の周りは何もなかつた。見渡す限りの砂浜に、小さな小屋がポツンと立つてゐるだけだつた。だから、マイアがその小屋の前にずっと立つて娘を見送つてゐる姿が、いつまでも何にも遮られ

ることなく見ることが出来た。光一は何度か振り返って、マイアが黒い小さな点になるまでずっと娘を見送っているのを見たけれども、マイアの方は砂浜に建つ貧しい家など一顧だにせず、ただ前だけを見て歩いていた。

何にも無い砂浜がずっと続いている。海面とほとんど高さが変わらないままの砂浜が陸の奥まで延々と続いている。平坦な土地のうんと遠くに牛や羊の影が見え、立木が一列に行儀よく並んでいた。

「あの、ずつとこんな感じ?」

「そうよ。『煉瓦の街』に着くまではずっと砂浜」

一人ともマイアの作った皮製のサンダルを履いている。砂浜の砂はサラサラで、サンダルの中に入つてきてもそんなに不愉快ではない。

空を見上げれば、高い空がどこまでも広がっている。暑くもなく、寒くもない。空の色は、これから新しい人生が始まる春のつきつきした気分にも、何かに別れを告げる秋のような寂しい気分にも、そのどちらにも重ね合わせることができそうだった。

光一の目にじわっと涙が浮かびそうになる。彼は慌てて、マイアにこひらの世界について思ついたことを質問して氣を紛らわそうとした。

「今、季節は春? 秋?」

「暦の上では春ってことになるわ。でも、こひらあたりはあまり気候に変化がないの。別の国では暑さや寒さがあつてその都度衣服を変えるらしいけど」

ああ、と光一は思った。光一も昨日からずっとシャツ一枚で過ごしている。

「あの、着替えとかはどつするの？ 何も持つてないけど」「必要になつたら手に入れればいいわ。ああ、村が見えてきた」

ナイアが言つとおり、前方にいくつかの家が集まつているのが見えてきた。

「あそこでお昼にしましょ」「う

ナイアと光一は村の中に入つていく。村の者は誰もナイアに声を掛けようとしてない。そのくせ光一には好奇心満々に不羨な視線をぶつけてくる。

けれども仕方ない、と光一は思った。確かにここの人間にとつて自分はさぞかし奇異に見えるんだろうから。

ナイアを初めて見たときも彫が深いと思った。でも、この村の人達はナイアよりも更に一段と彫が深いように思つ。眼窩が落ち窪んでいるかのようでその隣に鼻が高い壁のように聳え立つっていた。色は白いが、ナイアの肌がきめ細かいのに対すると、ちょっとがさがさした感じだつた。そして皆やたらと背が高い。光一は日本にいても小柄で和風顔だから、僕はこの人たちには本当に異世界の者に見えるのだろうつな、と彼は思った。

もつとも、光一が一目見て異界の者だとわかる風貌なのは、随分と便利なことのようだつた。

「ここが『砂浜の村』よ。さ、お昼をもらいましょ。どの家がいい

？」

ナイアは立ち止まり、光一に向かつて言ひ。

「え？ どの家つて……。君のほうがよく知つてると思つただけど」「どこの家も似たようなものよ。どこも貧しくて、私と母さんを嫌つてゐる。どこでも私にとつては一緒だから、『コーラル』が選んで」「…………じゃあ、ここにしようかな」

ナイアは光一が指差した家のドアをノックした。出てきたのは、やはりとても背の高い、そしてナイアより一層彫の深い、色白の中年の女だった。彼女はナイアを見て露骨に嫌そつた顔をした。

「なんだい」

「見て。『海から来た者』よ」

ナイアはそういつて光一の手を引っ張りその女の前に突き出した。女は目を見開いて光一を眺める。彼が「海から来た者」だと、一目で納得したようだつた。

「おやまあ、ほんとだ。のつべりしてゐねえ。……で、何が欲しいんだい」

「お昼ご飯を頂戴。それからこの瓶に飲み物を入れて。二人分ね」

ナイアは鞄から持つてきた陶製の瓶を渡してそう言つた。女は首を竦めただけで無言で家の中に戻つていつた。

「のつべりしてゐ、つて僕の顔のこと……なんだろつね。やつぱり」

「そうよ、この辺でコーラルみたいな顔の人間なんていないもの。」

『海から来た者』は『顔がのつべりしている』のが特徴だつて聞い

てたけど、本当に「一イチの顔つて平べつたいわよね

「…………」

「助かるわ。すぐ信用してもらえるし」

「…………そつ…………」

中年女が両手に紙包みを持ち、脇にナイアの渡した瓶を抱えて戻ってきた。

「ほら。水と食料だよ」

ナイアは無言で受け取りそのまま踵を返した。中年女も厄介払いするようにバタンと扉を閉めた。光一は呆気に取られてナイアとドアを交互に見る。

「何ぼうつと突つ立つてるの。早く来なさいよ」

ナイアが振り向いて言った。

「あの、お礼くらい言つた方が良くない?」

「いいのよ。後で帝国府が一食分の食料と飲み物を給付してくれるんだから。多分ここらじや手に入らないような珍しい品をね。私達に物をやつた方があの人たちにとつても得なの。だから普段口を利くのも嫌な私にでも物をくれたのよ」

それでも光一は閉まつたドアに一礼して、立ち去つていいくナイアを追いかけた。

## 地理と文學と魚

「砂浜の村」を離れたところで、一人は腰を下ろした。何も無いのでやはり砂の上に座つた。村の中年女がくれたのは、丸いパンのようなものに、チーズとハムが挟まつたもので、チーズが少々獣臭い以外は光一にとつても違和感のない食事だった。

食後、一服しているときに、光一はナイアにこの世界の地理について訊ねた。「旅をする」と言われて後を付いてきているが、自分がこの世界の何処について何処に向かっているかわからない。そもそもこの世界の何処に何があるのかさっぱりわからないのだ。

「あのや、地図みたいなものないかな  
「地図?」

ナイアは砂の上についと横線を引つ張つた。どうやら砂の上に描いてくれるつもりらしい。

「いっちはが海。いっちはが陸ね」

ナイアは指で横線の下を海だと示し、上を陸だと示した。そして海岸線を表す横線からによると縦に波線を引いた。

「これが河。ねえ、あなた達の世界には河があるつて本当?」

奇妙な質問に光一は面食らつ。

「え? うん。たくさんあるけど?」

「へえ。いっちはこの河だけよ。海に注ぐまで枝分かれするけど、

源流は一つ。皇都にあるの

「それが『海の源流』？」

「そうよ。皇都から流れた水が河になつて海になるの」

「河には名前がないの？」

「普通は『河』としか呼ばないけど、ラクロウ河つて名前はあるわ。『生命の道』つて意味の古語なんだって母さんが言ってた」

そういうつてからナイアは辺りを見回した。誰かが自分の話を聞いていいのか確かめるかのよう。元気

光一は特に何も考えず、自分が覚えやすいようにナイアの描いた波線の横にカタカナで「ラクロウ」と書いた。ナイアはそれを見ると弾かれたように頭を上げ、驚愕の表情で光一を見た。

「それは……、まさか文字？」

「え？ あ、うん。そうだよ。やっぱり君たちの世界の文字とはだいぶ違うんだろうね。でも、これが僕の世界での文字なんだ」

光一は、ナイアは二ちらの世界とあちらの世界で文字が違うことに驚いていたんだと思った。しかし、ナイアの驚きはそこにではなかった。

「文字はそりゃ違うんでしょうけど。で、文字を知っているなんて貴方、ひょっとして凄く身分が高いの？」

「へ？ 身分？ いや、僕は普通の高校生だよ。ウチだってごく普通のサラリーマン家庭だし。……苛められてるくらいなんだから強いて言えば僕の身分は低い方かも」

「それなのに、文字を知ることを許されるの？」

「……？ 許されるも何も、学校で強制的に勉強させられるよ」

「へええ。いいわねえ」

ナイアは心底羨ましそうに言った。

「じゃあ、君は字の読み書きは出来ないの？」

ナイアはムツとした表情を浮かべた。それから複雑な表情をして考え込み、再び周りを見回してから光一にそつと話しかけた。

「あなたとは一緒に旅をするものね。あまり隠し事をしても仕方ないわ。あのね、私は文字を読むことも書くこともできるのよ。それからこの帝国の地理だって知ってる。でも、絶対にそのことを誰にも言つては駄目」

「文字を知つてることとは、この世界ではきっととても珍しいことなんだね？」

ナイアの話の内容と話し振りに光一はそう眞剣をつけた。

「珍しいだけじゃない。普通の民は文字を知ることを禁じられているわ。地理に詳しいのも怪しまれる」

「じゃ、君はどうして知ってるの？」

「母さんよ。母さんが教えてくれたの」

「それは君のお母さんが特殊な人だつてこと？」

ナイアは苦虫を噛み潰した様子で言った。

「やうだつたみたいね。でも母さん、自分が皇都にいたつてことしか教えてくれないの。昔のことは全部秘密。そして私が文字を知っていることも村の人たちには絶対秘密。貴方もこの先そんなこと誰にもばらさないでよね？」

ナイアの田はとても真剣で、光一も眞面目な顔をして深く頷いた。

「うん。絶対喋らない。約束するよ」

ナイアは光一の約束と引き換えるように、再び地図を描き始めた。

「河が海にでる出口にあるのが『煉瓦の街』よ」

「今から向かうところだね」

「そう。『煉瓦の街』は『土の国』の首都でもあるの」

ナイアは海岸線から半円状に国境を描いてみせる。

「『土の国』には土しかない。だから皆家は煉瓦で建てるしかない。木は生えるには生えるけど、ちゃんと人間が世話をしてもやらないと育たないわ。あとは牧草が生えるくらいね。だから、みんな羊と牛を飼つて暮らしてる」

「魚はとらないの?」

光一の質問にナイアは物凄く不愉快そうな顔をした。

「冗談じゃないわ。とんでもない。食べない、絶対」

「どうして?」

「どうしてって……。決まってるじゃない。魚は死者の魂だからよ」

「へえ……」

「貴方達の世界はそういうじゃないの?」

「人は死んでも魚にはならないと思つ」

「……こちらの世界ではね。人が亡くなるとその骨は河に流す。そして海に流れ着いた死者の魂は魚になるのよ。そして、その魂に再び定められた時がくれば雲に乗つて、皇都の『海の源流』に降り注ぐ雨の滴になる。皇帝は、『海の源流』に滴り落ちてきた魂に、

住む土地と運命を『』える

「…………」

光一には、それが事実なのか神話なのかわからない。全くの異世界ならそれが事実であるのかもしれない。それとも、人の生き死にそのものは自分の世界と同じで、ただそれに対する意味づけが違うだけなのかもしれない。

「私達『浜辺の者』が卑しいって言われるのはね。きっと魚を口にしているに違いない、て思われるてる部分も大きいからなの」

「食べてないのに？」

「私達は食べない。でも、遠くの人たちは好き勝手言つ。それに魚のいる海のそばに住んでるだけでもなんだか薄気味の悪いものだと思つらしいわ」

「そういえば、と光一は思つ。不動産がどうこうとこう話を両親がしていたときに、やはり「墓地のそばは地価が安い」みたいなこといつてたつて。死者の眠る場所と近いというだけでも何か忌み嫌われるものなのかもしれない。

「まあ、『煉瓦の街』の橋を渡るまでは、私の顔を知つている人もいるから、ちょっと嫌な思いをするかもしれない。でも河を上る船は河の対岸、つまり橋の向こうにあるの。そこまで私は行ったことがない。そこなら私が『浜辺の者』出身だつて直接知る人も少ないとからずつとマシになるわ」

「僕達、河を上るの？」

光一の質問に、ナイアはああ、といった顔をし、再び砂上の地図に指を落とした。

「『土の国』よりもっと陸の奥に入ると今度は『石の国』があるの。そこから更に上流に『森の国』があるのよ。そして皇都はこの『森の国』にある」

ナイアは、海を示す横線の上に、河を示す縦の波線を中心にして鏡餅を重ねるようにして地図を描き上げた。

「これだけ?……随分単純なんだね」

光一の想像する世界地図というのはもっと「じみ」みしていたものだったので、思わずそう口にしてしまった。それで、ナイアは少々気を悪くしたようだつた。

「これが全部つて訳じやないのよ。河から外れた地域に他にも国があるそうだし。それに、もっと河から遠ざかつた地域には蛮族がいるらしいわ。皇帝に従うのもいるけど、歯向かつのもいて、皇帝軍が警邏しているとか聞いたこともある」

「でもね。とナイアは続ける。

「私達は皇帝に住む場所を与えられるとそこからの旅は原則禁止だもの。あなた達『海から来た者』の案内は例外として。あと帝国府のお役人とか特別に許可を得た者も旅はするわね。でもそれは河を使って皇都と往復するだけ。それから荷物も皇都からの河を上り下りする。とにかく移動は河で皇都と行き来するだけだから河沿いの国のことしか話は伝わらないものなの。だから河から離れた地域がどうなつていてるか知つていてる者はここにいらっしゃないはずよ」

それでも。と今度はナイアはちょっと得意そうになつた。

「私は随分いろいろなことを知っている方だと思うわ。母さんからいろいろ聞きました。母さんは一度京都から『砂浜の村』まで旅をしているでしょ。だから、『石の国』『木の国』だって一度は見ている。それから、絶対内緒だけど私は文字が読めるでしょ。ウチの床下にこっそり隠してある書物だつて読めたの。だから私はとても物知りなのよ。よかつたわね、コーラス、案内人が私で」

「あ、うん。そうみたいだね」

確かにナイアの話を聞いていると、ナイアはこの世界でも結構情報通のかもしない。それに、テキパキものごとを決めていく性格は、あまり自分でものごとを決めてくない光一にとつて楽な存在だった。

「うん。君が案内人で助かるよ」

ナイアはニコニコと笑うと立ち上がった。

「さあ、そろそろ次の村に向かわないと夜泊まらないわ」

「次の村？ 次の村はなんていう名前？」

「名前？ 次の村も『砂浜の村』よ。言つとくけど『砂浜の村』は一箇所だけじゃないのよ」

ナイアは足元の地図に描かれた海岸線を、足でさうさうとなぞった。

「浜辺にある集落のことはみんな『砂浜の村』というの」

「じゃあ、『煉瓦の街』まだまだずっと歩かなきゃいけないわけ？」

光一は気が重くなつた。砂浜を歩くのは、舗装された道を歩くのと勝手が違う。普段使わない足の筋肉を使うようで、変な疲れ方を

していた。

「ずっと、つたつてあと六つよ。ここで宿や食事を取りながら、そ  
うね、三、四日で着くわよ」

「三、四日……その間中のまんまの景色を見ながらただ歩くだけ  
なの？」

それの何が苦痛だというのが、ナイアはさっぱりわからないとい  
う顔をした。ナイアにとつては『煉瓦の街』に行けるだけでも樂し  
いのに。彼女は、分らないものに全く関心なさそうに、光一に背を  
向けるとすたすたと歩き始めてしまった。

## 煉瓦の街

「煉瓦の街」までナイアと光一の足では四日かかった。

泊まるときも、初めて昼食を貰つた時と同様だった。ナイアの顔を見た村人は最初あからさまに嫌そうな顔を彼女にみせる。しかし、彼女が光一を前に押し出すと表情を変える。彼らの顔に、この旅の連中に与えてやるものと後で帝国府が支払ってくれるだらうものとを思案する表情が浮かぶ。それから顎でしゃくって家の中に招き入れてくれるのだった。

「砂浜の村」の家はどこも貧しく、客人を泊めるような部屋などなかつた。だから物置部屋だつたり、その家の住人が寝静まつたあと食堂だつたりに二人は寝かされた。そういうわけで、夜の間は光一はナイアとゆつくり話をすることができなかつた。

四日目の昼、砂浜の彼方に小山のようなものの影が見えてきた。近づいていくと、赤っぽい。更に近づくと、確かに赤煉瓦を積み上げて出来た建物が立ち並んでいる街が見えてきた。

赤煉瓦造りの丸い塔を境に、道も赤煉瓦で舗装されるよつになつた。長く砂浜に馴染んだ足は地面をついて踏みしめようとするが、そんな力を入れなくとも楽々歩いていく。

街中に入つていくにつれて人の姿も増えていった。皆、舗装された道の両端の歩道を歩いている。しかし、ナイアは一段低い車道を歩いていた。

道行く人の服装もナイアと違つ。この街を歩く人々は皆綿なり絹なり柔らかい素材で、もう少し立体的に仕立てられた服を着ていた。光一はこちらの世界の人は皆こんなものかと気にしていなかつたが、ナイアの麻袋を改造した服はここに来ると本当にみすぼらしく、いかにも物乞いといった風情だつた。

「あなたは歩道を歩いたつていいのよ」

ただ、みすぼらしい格好をしていよつが車道を歩かされていよつが、ナイアはナイアだつた。傲然と顔を上げ、どこか命令口調で光一に言つ。

「でも……君が歩道を歩かないのに、僕だけ歩くわけにはいかないよ」

「そんなの、……つ」

ナイアは光一に話しかけるため立ち止まつていた。そこに荷馬車が通りかかり、避けなかつたナイアに荷台がぶつかつた。彼女はつんのめつて道に手をついた。荷馬車は何事もなかつたかのように走り去つていく。

「だ、大丈夫？」

四つん這いになつてゐるナイアに合わせて光一も彼女の傍に座り込む。その鼻先を馬のひづめと車輪が掠めた。この二つが巻き上げた砂塵が目や口に入る。

「あなただけでも歩道に上がつてー」

ナイアが苛立たしげに言つた。

「私は自分の身を守るので精一杯なの。あなたの心配までできない。だからあなたは安全な歩道に上がって頂戴」

「でも……」

光一もナイアの言ひことはわかる。僕に注意を向けていたら、ぶつかつてくる馬車に対する注意がおろそかになる。けれども　。

「でも、やっぱり僕だけ歩道にってわけにはいかないよ。僕自分で気をつけるから。僕のことは気にしないで」

「何考えてんだか。だって……」

ナイアは何かを言いかけたが、また向こうから馬車がやってきた。一人とも車道ぎりぎりに身体を横にしてなんとかやり過ごす。あとは、こんな調子で次々に襲い掛かつてくる馬車や、その荷台、そこからはみ出している荷物を避けるのに一人とも専念し、互いに喋ることはなかった。

路地に入ると人も馬車も通るものが途絶え、やっと二人並んで歩くことができた。ただ、もう一人ともぐつたり疲れてしまい口数は少なかつた。

「あそこが宿よ」

ナイアが煉瓦造りの一階建ての建物を指差した。間口は狭い。ここに着くまでにこの「煉瓦の街」の各々の建物はとても間口が狭いことはナイアに教えてもらっていた。基本が砂地で建物を建てづらい土地に、沢山の建物がひしめき合つてるので各々の道路に面する部分はごく小さいのだと。その代わり奥行があるので、とナイアは教えてくれていた。

普通の民家に見える宿屋の扉を、ナイアは叩いた。中から出でてきたやはり彫の深い中年男だった。ただし「砂浜の村」の者と違い柔らかい布で仕立てられた、洋服に近い格好をしている。男は、麻袋の服を纏つたナイアを見て眉間に皺を寄せた。汚らわしいものを目にした不愉快さを隠すことなく。

けれどもナイアは臆さない。

「『海から来た者』の案内で皇都まで行くの。あそつての船に乗るから泊めて頂戴」

宿屋の男は、ふんと鼻を鳴らして言った。

「じゃあ、そつちの『海から来た者』は一階の客室だ。お前は裏の馬小屋だな」

ナイアは肩を竦めただけで、光一に、じゃあね、と言つて、隣の建物との隙間から宿屋の裏に回ろうとした。

「ちょっと待つてよ。あの、彼女も同じ客室に泊めさせてください」

光一は宿屋の男にそう頼んだが、相手はてんてつりあわなかつた。光一は食い下がる。

「馬小屋で寝る、なんて……。ひどいじゃないですか」

「うちに『砂浜の村』の人間なんかを泊める部屋はないね。馬小屋を貸してやるだけでも奇麗なもんだ。それを田舎で『砂浜の村』の連中がやって来るもんだから、うちばい近所に苦情を言われて困つていいふらうだ。それでも泊めてやろうとこうんだから、感謝さ

れこそすれ批判されるいわれはないね

「コーアイチ」

ナイアが光一の傍まで戻ってきて囁く。

「たとえ馬小屋でも、この街で『砂浜の村』の者を寝泊りさせてくれるのは本当に珍しいの。ここくらいしかないのよ。あまりここを主人を怒らせないで。怒らせてこれから『砂浜の村』の者には一切宿を貸さない、なんてことになつたら村の者みんなが困るわ。母さんだつて困る」

光一はちょっと押し黙つてから宿屋の主人に言った。

「じゃあ、僕も馬小屋に泊まります  
「好きにしな」

そう言つて男はバタンと扉を閉じた。ナイアは首を振りながら建物の裏手にまわりはじめた。光一もついて行く。

「全く、コーアイチの考えることってわからない」

「だつて……」

「どうも私に同情してくれているようなんだけじね。あなたが一緒に車道を歩こうが馬小屋に泊まろうが、私が歩道を歩けない、宿の普通の部屋に泊まれないっていうのは変わらないの。二人そろつて不快な思いをするなら、せめて片方だけでも快適な思いをした方がいいじゃない」

「それは……そうだけど」

でも、と光一は思ったことを口にだした。

「僕が歩道や部屋で快適な思いをしててもさ、その間君が嫌な目にあつてゐるつて思つと、僕も気分良くないよ。だからやつぱり君と一緒にいるよ」

「それで別に私の不愉快さが減るわけじゃないんだけど」

「……そうだね。でも、僕は自分ひとり快適だといたたまれないから……。僕の好きなようにしてもらつていいかな？」

「ひつ下手に頼まれるとは思つても見なかつたナイアは、しばらく言葉を失つてまじまじと光一を見た。

「わ、私はいいわよ。……コーライチつて変な人ね」

そつぽを向いて、馬小屋の扉に手をかけたナイアだが、表情に少しだけ嬉しそうなものがあつた。

## 船に乗る前に

その夜、ナイアは細々と光一に明日の予定を説明した。

「明日はこの街中で買い物よ

ナイアは楽しそうだった。やっぱり女の子は買い物が好きなのかな、と光一はのんきなことを考えていた。

「お店の前まで私が連れて行くけど、今日の様子じゃ実際の買い物は光一に任せた方がよさそうね」

「別に構わないけど。どうして？」

「私が買い物をしようとしたら、品物を床に放り出されるのが関の山よ。それを這いつくばって拾わなきゃなんない。それを見たら、あなたまた私のことを氣の毒がつてしまつてしまつでしょう？」

光一は苦笑いして承諾した。

「だつて、君がそんな目にあつて辛いんだよ。僕が買つたほうがいいなら、そうするよ。で、何を買つたらいいの？」

「シャツ、ズボン、肌着、靴下、もちろん頑丈な靴 底に厚みのあるものね。これから石畳の道を歩くことが多いから靴は大事よ。それに」

ナイアは細々とした生活用品を挙げ続けた。光一が覚えられない、と言つと自分が覚えているから大丈夫だ、と請合つた。

実際、次の日ナイアはあちこちの店に光一を連れまわし、店の前

でそこで買つべき品目を指示した。一軒あたりの買い物は多くても数点だつたから、光一にも簡単にできた。

光一にとつては、買い物は日本にいた時より楽かもしぬなかつた。彼の顔を見ただけで店の主人は彼が『海から来た者』だとすぐ理解し、必要なものを適当に見繕つて品物を包んでくれる。そして光一は何もしなくて構わない。

光一が日本で買い物が苦手だつたのは、多くの商品の中から自分で欲しいものを選ばなくてはならないことと、会計を無難に済ませられるかどうか。例えば、お金が足りなくなつて恥ずかしい思いをしないだろうか、とか、レジには若いお姉さんがいるのに何か場にそぐわない行動をしてしまつて笑われやしないだろうか、とかいぢこぢ緊張することだつた。

だけど、ここでは、光一は店の主人が選んだものをナイアのところに持ち帰るだけだ。そしてどんな品物を渡されようがナイアは別段文句を言わなかつた。けれども、服屋の前に連れて行かれたときには光一はナイアに訊ねてみずにはいられなかつた。

「あのさ、このまま僕が買い物してると男物の服しか包んでくれないと思うんだけど……。ナイアの分、どうしよう。女の子の分も下さいつて頼んでみようか?」

「私が『砂浜の村』の者である限り、渡されるのは麻の袋よ

ナイアは自嘲氣味に言つた。

「男物をたくさんもらつてきて。連れは男の子だつて言つて。大きさは、そうね。あなたと同じくらいのでいいわ

光一は、ナイアは麻袋が嫌でそれなら男の子の服の方がマシだと考えたのだろうと単純に思つた。日本でもボーイッシュな格好を好む子がいるし、ナイアの性格なら似合いそうだな、とも。

「ええっ？ 髪を切るの？」

買い物を済ませ、宿屋の馬小屋に戻ると光一はナイアに鍼を手渡された。これで髪の毛を男の子に見えるように切ってくれ、と言つ。

「でも僕、人の髪の毛なんか切つたことないよ。とてもできないよ」  
光一の頭には、同級生の女子のショートカットがあつた。あんな風にするなんて絶対無理だ。

「上手でなんかなくていいから。男の子くらいの長さにして。それでいいから」

「でも……」

「こっちではね、特に裕福じゃなければ、床屋に行かないことは普通なの。みんな親が切つてるわ。下手糞な親だつて一杯いるわよ」「けど……」

「短くするだけでいいのよ」

「でも……もつたいないよ、そんなに綺麗な髪なのに……」

「そんな甘つたるい」と言わないので…」

ぴしゃりと、ナイアが言つた。赤ワイン色の瞳が強く光つていた。

「私は別人になるの。生半可な気持ちで人生を変えたいって思つてゐるわけじゃない」

「…………」

ナイアの迫力に気おされて光一は言葉を失う。

ナイアの方も、言いすぎたと気がついた。でも、なんかコーライチは優しすぎるといつも、考へが甘いといつも、イラつとするところがあるのよね。そうナイアは思つが、やはりここは穏やかに説明するべきだろうと思い直した。

「明日、橋の向こうへ行くわ。私、今まで橋の向こうへ行つたことがないの。向こうへ行けば私の顔を知つてゐる人もいない。私はこれから男の子の振りをする。そして別人になります。もう私は、『砂浜の村』のナイアつて娘じやないの」

それに、とナイアは光一をちょっとからかうような目で見た。

「皇都までの旅は長いもの。男の子の格好をしておいた方が安全だと思うわ。もし私が女の子の格好で危ない目にあつたら、コーライチ助けてくれる？ つていつか、助けられる？」

「無理……だと思つ」

「ね。だから私は男の子になる。とにかく私の髪を切つて頂戴。ただ短くするだけでいいから」

光一は恐る恐るナイアの栗色の髪を一房手に取り、鋏で軽く挟んだ。そこから力を入れる決心はなかなかつかない。しばらく躊躇つてから、光一は目を瞑つて鋏を持つ手を握つた。

「えいっ」

光一の拳に栗色の髪の束が降りかかった。さらさらしていてとても気持ちが良かつた。でも、ナイアの頭には、一箇所だけ短いところが出来て、なんだかとてもいたたまれない気が光一はした。

「これでいいのよ。どんどんやつていいって」

ナイアが振り向いて光一を励ます。それで光一は再び、ジョキつと髪を切り落とす。一部分だけ短い方がかつて悪いためだから、ショートカットだつてきっとナイアには似合うはずだから、そう自分に言い聞かせながら、次そのまた次と切り落としていく。

光一は自分が床屋で髪を切るとき床屋がどうしていたか、その記憶を頼りに、鍼を縦にしてみたり、掬い取った髪の毛先だけ切つて戻してみたりと工夫を重ねた。その甲斐あってか、毛先は揃わないものの、なんとかショートカットに近い髪型になつた。そして髪を短くしてみると、外見だけなら西洋人形のようなナイアが意外に少年っぽく見える。

「どう?」

「うん。なんか……カッコいいよ。それで男物の服を着てみたら男だと言つても十分通るかも」

ナイアは物陰で男物のシャツとズボンに着替えた。光一はその間ぼんやり考えていた。生まれついた容貌より、こういう風に生きたいという本人の意志の方が重要なのかもしれない、と。でも、そしたら、僕はこれからどんな格好をすることになるんだろう。

ナイアが物陰から一歩出てきた。ちょっとだけ眉を寄せて心配そうに光一に尋ねる。

「どう? 男の子でやつていけそう?」

「うん。大体男の子に見える。元が女の子だつて知らない人だつたら、ちゃんと男の子に見えると思う」

「そう、良かつた

ナイアは愉快そうに微笑んだ。

「じゃ、コーラー、私に名前を頂戴」

「へつ？」

「いやあね。母さんの家を出るときに言つたじやない。私は名前を  
変えるつて。母さんからこの約束だけは守れつて言い渡されてるの。  
まあ、別に母さんとの約束がどうであれ、ナイアつていうのは女  
子の名前なんだもの。いつまでもこんな名前でいるわけにはいかな  
いわ」

そういえば、光一が名づければ「あらには滅多に無い珍しい名前  
になるだろ」と彼女は言つてつたつけ。

「ね、どんな名前がいい？」

ふつと光一は同じ高校に通つている女の子を思い出した。一番の  
美少女でめっぽう気が強く、女子達のリーダー的存在だった。ナイ  
アと彼女は光一にとつて似通つた存在に思えた。もつとも同じ学校  
の彼女は光一に話しかけたりなんか絶対にしないけれども。

「……美鶴、なんてどうかな？」

「ハ・ツ・ル……変な名前ねえ」

自分で変わった名前が欲しいと言つていた癖に、ナイアは小首を  
かしげている。

「僕が知つてゐる女の子の名前なんだけど……、別に男の子がつ  
ても変じやない名前だよ。ああ、親戚に『満』って名前の男の子が  
いる

「男女どっちでも使える名前なんだ！ それは格好いいわね」

ナイアの表情がパアツと明るくなつた。

「ちょっとまだ変な感じはするけど、名前を変えるつていうのはそういうもののよね。慣れないから違和感があるだけで、慣れたら気にいふと思うわ」

ナイアは立ち上がり、少し昂揚した様子を隠そうとせず、心底嬉しそうに言つた。

「私はミツル。男の子。もう『砂浜の村』の人間なんかじゃないわ。そしてもう誰からも蔑まれたりしない人生を生きるのよ！」

そのワイン色の瞳には、自分にとつて足枷でしかなかつた故郷と母親からやつと逃れられたのだという解放感と、この先の人生を思い通りに生きてみせるという自信と生命力とが溢れていた。

「煉瓦の街」に入つて初めて、一人は河岸に出た。河の幅はあまりに広すぎて向こう岸が見えない。ひたひたと水が押し寄せる様を見て、光一はここへ来たとき、『水の砂漠』に独り取り残されたようだ」と思ったことを思い出した。でも、今は、今は心強い案内人がいる。

光一は隣を見た。ちょっと華奢だが、少年といつても十分通用するナイア、いやミツルが鼻歌を歌いながら歩いていた。

「あそこに橋があるわ」

ミツルが指差した。確かに河岸から河の中へ向かつて木造りの橋が差し出されている。河の方は広大なのに、その橋は幅が狭く頼りなげで、またその上を歩く人も少なくもの寂しげに見えた。

それをミツルに伝えると、例の『』とく明快な返事が返ってきた。

「だつて、橋を渡る人なんてあまりいなもの。片道だけでも1時間ほど掛かるんだそうだもの。そんな人通りの少ない橋を大きくする必要ないじゃない。前にも言つたけど、『土の国』では木材って貴重なんだから」

「『煉瓦の街』で暮らしている人は渡らないの？」

「渡る必要ないでしょ。橋のこっち側の街だけでも生活に必要なものは揃うし。私達の旅の準備だつて十分整えられたじゃない。こっちになくて、あちらにあるのは『上り船』乗り場、あちらになくてこっちにあるのは『下り船』降り場だけ」「じゃ、この橋を渡るのは旅をする人くらいなんだ」「そ。で、さんざん言つてるけど、旅をする人間つて、いのうのは限ら

れてるのよ

ミツルの言つとおり、橋の上は閑散としていた。ミツルはとても嬉しいらしく、人気が途絶えたときには、くるくる回つてみたりまるで小さな子供のようになはしゃいでいた。

確かに橋は長く、いくら歩いてもなかなか対岸が見えてこない。広い河を橋から見渡してもやはり水面しか見えない。河口付近だからあまりはつきりした流れはなく、海が近いせいか潮風が吹いていた。

ようやく対岸が見えてくるとミツルは駆け出さんばかりとなつた。ミツルにとつての新天地。誰も自分を知らないといつ自由さが彼女を呼んでいるのだろう。歩き疲れた光一は、さつさと駆け出していく彼女の背を眺めながら後ろをマイペースで歩いていた。

ミツルに追いついたのは、ミツルが一軒の店の前でなにか紙切れを手にしているところだった。

「なあに、それ

「護符よ」

ミツルはあまり興味のない様子で答えた。

店の中から、彫は深いが頬のたるんだ年配の女が光一に言った。

「おや、あんた『海から来た者』だね。これから一人で河を遡つて皇都まで旅をするんだろ？ それじゃあこの護符は絶対に必要だね。特にあんたは」

「あの、護符つて何ですか？」

「あんた達を守るお札だよ。あんた達は生命の流れ逆行するんだ

からね。いろんな魔物や呪術者に狙われちまつよ

「……？」

怪訝に思つ光一に、ミツルが説明する。

「前に言つたでしょ。人は死ぬと河に流されてその魂は魚になるつて。魂は皇都の『海の源流』に降る雨となつてこの世に降りてきて、河によつて生まれる土地まで流される。そして、その生を終えると河を下る。これが生命の流れ」

「ああ、うん」

「ところが私達は人の形をとつたまま、この河の流れつまりは生命の流れに逆行する、といつわけ」

商売女がすかさず割り込む。

「これはとんでもなく恐れ多いことだよ。生命の理に反するものだからね。これじや、魔物や呪に襲われても簡単にやられちまつよ。さあ、護符を買つた買つた。この護符が守つてくれるんだかい」

光一はミツルを見た。ミツルは商売女の脅かしにちつとも関心を示した風はなかつたけれども、一枚買ってはどうかと光一に言つた。それで光一も一枚その女から護符を買つたのだった。

「あの……魔物や呪術つて、じつちの世界にはあるわけ？」

「みたいね。私も本でしか知らないけど」

「……この護符つていうので防げるのかな？」

護符はごわごわと分厚い紙に、光一の見たことのない文字が数行に渡つて書き連ねられていた。その文字が神秘的で確かになんだか靈験ありそうな感じだった。

「さーあ？」

ミツルは声に抑揚をつけて、自分は疑わしく思つてゐることを聲音で示した。

「だつて、紙切れにありきたりの文句を書いているだけよ。旅の途中で皇帝と皇帝に屈服した妖魔とその眷属がこの者の道中を守つてくれますように、つて。ただそう書いてあるだけ。文字の読めない人には何だか不思議なモノにみえるんでしょうけど」

自分がまさにそう思つていたので光一は少しばかり恥ずかしい思いをし、それを誤魔化すために聞いてみた。

「じゃ、なんで買つたりなんかしたの？　しかも君の分まで」「旅をするものが皆買うものなんだつたら、私達も買つておかないと怪しまれるかもしねないもの」

「なるほどね……」

乗船場には船が泊まっていた。ナイアレやミツルの話から、光一はこの河がこの世界での主要交通手段なんだろうと思つていた。だから、タンカーとまでいかなくともせめて見上げる位の大きさの船を想像していた。それが実際に泊まっているのは日本の漁村なんかにありそくなくらいの大きさの船だつた。

確かに、海と同様この河も水底が浅い。大きな船では航行できそうにない。この船も底が平らになつていて、光一が知つてゐる船とは違う形をしていた。

「一人乗るわ……じゃなくて……えつと、一人乗るよ

ミツルは船の傍で煙草咥えている船員らしき人間に声を掛けた。途中で、女の子言葉を引っ込めて男の子っぽい方に変えている。

「もうちょっと待ちな

船員は煙草の煙をふりふり吹き出した。ミツルに答えた。

「俺も、もう一台荷物を積んだ馬車が来るのを待つてゐる。その荷を積んだら出航する。まあ、それまでその辺をぶらぶらしてな」

「じゃ、河沿いでも歩いてる」

「ああ、また後でな」

船員は再び煙草を加え、片手を上げて見せた。

河岸には誰もいなかつた。水底がはっきり見えるほどの薄さしかない河が、傾斜のない河原にひたひたと押し寄せている。光一はまた、海の砂漠で自分が感じた恐怖を思い出した。だから、ミツルに話しかける。

「ちゃんと、男言葉使つんだね」

「当たり前じゃない。もう私、男の子なんだから」

でも、僕の前じゃ女言葉のままなんだ、ちょっと可笑しいような嬉しいような気持ちに光一はなつた。しかし、ミツルは険しい目で前を見ている。

「どうかしたの」

「……何か変」

「何が変だつて言つの？」

「あそこよ。……なんていうか、黒い霞みたいなのが……」

ミツルの指差す先、一人から十メートルくらい離れたところに、確かに黒い靄のようなものが立ち上つていた。二人が息を呑んで見つめている内にそれはますます密度を増していく。やがてそれは黒い布を頭からすっぽり被つた老婆の姿となつた。

光一はこんな老婆を見たことがなかつた。不思議な現れ方や黒マントを別にしても、ここまで年老いた人間は初めて見る。

彼の祖母は、父方母方どちらも健在だ。父方の祖母は、明るい茶色のカツラ ウィッグというらしい を被り、色つきサングラスをかけ、きつちりお化粧する人だ。母方の祖母は、化粧つけはないが、グレーの髪を上品に後ろで結い、なかなか素敵な洋服を着、できるだけ背筋を伸ばしている。

田の前の奇妙な老婆は全く違つていた。黒マントから覗く顔の全體が皺だらけで、目の下も頬も肉が弛んでいる。皺と皺の間の皮膚もまるで干からびえているようだつた。真っ白な髪をそのまま垂らし、髪と頭の重みに耐えかねたかのように腰を曲げ、杖に体重を預けてまつすぐ光一達を見つめていた。その瞳も白く濁つて輪郭がはつきりせず、実際に見えているのかどうかわからない。

「……辻の巫女？」

ミツルが暫く沈黙した後、こう呟いた。

「ツジノミコ？ このお婆さんのこと？」

「黒い靄から姿を現し、黒いマントを被つた老婆。辻の巫女についてそう書かれているのを読んだことがあるわ……でも」

ミツルは眉間に眉を寄せていった。

「辻の巫女は、辻に出るはずよ」

「辻？」

「道が交差するところよ。辻の巫女はそこに現れて道行く人に予言を下すのよ。でも、ここは」

ミツルは首を巡らせて言った。

「なんにもない、ただの河原よ。辻なんかじゃない」

「辻は田に見えるものだけとは限らんのじゃよ」

老婆が口を開いた。

「人と人の運命が交差するのも、私から見れば立派な辻じゃ」

「……ここで誰かと誰かの運命が交わろうとしているということですか？」

光一が尋ねる。しかし老婆はそれに答へず、ミツルの方に視線を移した。どうやら田は見えるらしい。

「お前は戻るうとしているね」

ミツルはきつ、と辻の巫女を強く見て言った。相手が巫女だろうが何だろうが、こういう時の彼女の赤ワイン色の目の強さはかわらない。

「いいえ。戻つたりなんかしないわ。私は出て行くのよ。新しい人生に向かうの」

巫女は別に気を悪くした風もなく淡々と言った。

「ここや、お前は戻るつもりしてこるよ。それは悪いことじゃない。だけど、今まで母親と平穏に暮らしてきました道からは大きく逸れるところになるね」

「望むところよ。『浜辺の村』で養まれて生きていたって仕方ないもの。ただ、私は出て行こうとしているのであって、戻るわけじゃないんだけど?」

巫女はミシルの疑問には答えずに言った。

「苦しいこともあるじやないよ。覚悟はできてるのかい?」

「もちろんよ」

「ならばよい……」

巫女の話が終わりそうだったので、光一は慌てて巫女に話しかけた。

「あのう、あの……わざと運命と運命の交差するところ、つて仰いましたよね。あのう、それって僕とミシル……いや、ナイアのことですか?」

巫女はふふっと可笑しそうに笑った。この老婆が始めてみせる人間らしい表情だった。

「残念だが、そうじやないね。本当を言うと、あんた達と別の者達の運命が交差するのはもう少し先じゃ。ただあんまり大きな辻にならうなんですね。」こちらのお嬢ちゃんの覚悟を確認してきたのか

光一はがっかりしてゐ自分に気が付いてちょっと困惑。僕はどんな答えを期待して、巫女にあんな質問をしたんだろう。僕とミツルとは運命の出会いだ、見たいな御託宣でも欲しかったんだろうか。光一は頬を赤らめる。

「それじゃあ、また、辻に差し掛かつたら会いに現れることにしよう。それまで道中達者でな」

巫女の姿がだんだんぼやけ、黒い靄となり、それも空中に拡散してしまつた。後には何も残らなかつた。

ガラガラガラガラ　馬車の音が聞こえた。振り向くとその荷馬車は停泊している船に向かつてゐる。ミツルが肩で大きく一息して言つた。

「出航ね……」

船の客はミツルと光一以外に、貨物の運搬を生業にしている者が数人だった。船長と皆は顔見知りのようで雑談を交わしながら船は進む。

河の流れは緩やかで、海からは風が絶え間なく吹き付けてくる。この船の大きな帆がその風を全身にはらみ、バサツバサツと空気を受け止める音とともに、船は軽やかに河を遡上していく。

「坊主、『海から来た者』か？」

「え、あ、はい。そうです」

荷運びの男達は気安く光一達にも声を掛ける。

「へえ。俺はこんな顔初めてみたぜ。本当にのっぺりしてるとなんだ」

「俺は前にいつぺん見たことあるぜ。やつぱりこの船便で乗り合わせたんだ。それにお前、京都に行けばこれほどじゃないけど、のっぺり氣味の顔の奴だつているもんだ」

「あの。僕以外の『海から来た者』に会つたんですか？」

光一は勢い込んでその男に尋ねる。

「ああ、お前よりずっと年上で……そうだな、俺たちと同じくらいの歳の男だった。働き盛りだつていうのに随分くたびれた顔をしていたなあ」

「あの男か」

別の荷運びも話に加わる。

「俺もその船に乗り合わせてたよ。本当暗い顔をしてたなあ。『元の世界に帰りたくない』って言うのを、案内人に説得されてたつけ」

光一が複雑な表情で尋ねる。

「那人、帰りたくないんだですか？」

「なんでも、向こうで首を吊つて死のうとしたんだそうだ。踏み台に昇つたところまでは覚えてるが、その後気を失つて、次に目が覚めたらこちらの海の中だった、とさ」

別の男が訊く。

「そいつはなんでも、死のうとなんかしたんだ？」

「なんだか、働いてた先から首にされたみたいなことを言ってたがなあ。それが死ぬほどのもんなのかねえ。別に俺たちみたいに荷運びになるなり、宿屋を開くなり、別の商売をはじめりやいいと思つがね」

そんな簡単な社会じゃないんだ、あつちは。光一は、その『海から来た者』に代わつて説明してやりたかった。けれども光一自身も、大人の社会は大変だくらいしかわかつておらず、うまく説明することができない。

「でも、家族は待つてるだろ?」

「そうそう、それを言われてその『海から来た者』も帰る気になつたらしいがね。坊主も早く帰つて親を安心させてやれよ」

「……はい」

僕だつて必ずしも元いた世界に戻りたいわけじゃない。こちらの世界どどっちがマシか比べているところなのだ。そんなことは言えず、光一は俯いてそう答えるだけだった。

「で、案内人がそつちの坊主か」

荷運びの一人がミツルに声を掛ける。

「は、はい。……あ、ああ、そつだよ」

ミツルは慣れない男言葉にちょっと苦戦気味だ。

「随分細っこいけど大丈夫か。旅は長いぞ」

「大丈夫だよ」

「見慣れない顔だなあ。俺は『煉瓦の街』に普段住んでるけど、お前に会つたことはないよ」

光一はひやりとする。ミツルの顔も少々強張つていたが、さりげなく返した。

「おじさんは、『煉瓦』の街のどつちに住んでるの？」

「上り船の出る側だ」

「わたし……僕は、下り船降り場の方だよ。それも街外れに住んでる。たまたま浜辺に用事があつて行つて見たらこいつを見つけたんだ」「ふうん。ま、俺も船を降りたらすぐ橋を渡つて自分の家に帰つちまうからな。そつちの方をうろついたことは無い。知らない奴は一杯いて当然だな」

その男は笑つて話を収めた。光一もミツルも、控えめに大きく息を吐いた。が、次の言葉に二人はまた緊張する。

船長が言った。

「まあ、案内人が普通の奴で良かつたよ。やつぱり『海から来た者』は海に現れるからさ、『浜辺の者』が案内人になることもあるんだ」「浜辺の者？」

光一が嫌な予感と共に聞き返した。

「ああ、『砂浜の村』に住んでいる奴らだ。汚らしき連中だぜ」「へつ」

別の男が吐き捨てるよ／＼吐／＼。

「『浜辺の者』なんかと乗り合わせんのなんて、勘弁勘弁」「あんな気味悪い連中と長旅なんて、俺なら途中で降りて船を変えるね」「坊主が『浜辺の者』でなくて良かつたよ」

一拍置いてミヅルは答えた。

「……あんな連中と一緒にしないでくれよ」

彼女のワイン色の瞳に強い光が浮かんでいる。それは言葉通りあんな賤民と一緒にしないでくれという怒りもある。が、それとともに、本当は彼女自身がその賤民に生まれついてしまったのだという悲しさや悔しさも含んでいた。

「やつぱりやつぱり飯こじよ／＼」

光一の緊張や、ミヅルの複雑な葛藤をよそに、のんびりした声で

船長が言った。そして、話題は全く別のものに移り変わつていつた。

「山よ、山だわー。」

と思わず女の子言葉で言つてしまつて、ミツルは急いで辺りを見回す。幸い近くにいたのは光一だけで、他には誰も聞いていなかつた。

「ほひ、山があるじゃない」

ミツル興奮した様子で光一を呼び寄せ岸の方を指差す。

「山……ていうか、丘じゃないかなあ」

船は出港してからしばらくは、見渡す限り水平な牧草地の中を進んでいた。ところどころ木が行儀よく一列に並んでいるのが見えたが、あれは防風のためだと客の一人が教えてくれた。

それがここにきて、地面に多少起伏がついてきている。けれども、三十分もあれば走つて上り下りできそうな、牧草で覆われた丘を山だとは言いかねる。確かに、地平線ばかり見てきた日には、そんな丘でも次から次へと現れる風景は目新しいけれども、山だと思つて興奮するのは間違いだろう。

「山っていうのは、もっと大きいものだよ

「……そつか……」

ミツルが顎に拳をあてて何かを思い出さうとしている。

「確かに、登つても登りきれくらいい長い坂道があるのよね。で、木がたくさん、それも無秩序に生えてるんでしょ。そして、熊とか狼とかふくろうとか見たこともない動物が一杯いるのよね。うん。母さんの本にはそう書いてた。そうね、あれは確かに山じゃない」

真剣な顔で額ぐみツルをみて、光一は笑つて言つた。書物でしか山というものを知らず、いちいち現実と照らし合わせて大真面目に確認する様がおかしかつた。

「そうか、君は山を見たことがないんだもんね」「あつちにはあつたの？」  
「うん。時々登つたよ」  
「へえ。いいわねえ」

丘は次から次へと現れる。荷運びの男の一人が遠くから声を掛けてきた。

「そろそろ『石の国』が近づいてきたぞ。牧草地が終わつて森が見えてきたら『石の国』だ」

いよいよ『土の国』を出ようとしている。男の言葉にミツルはべつと歯を引き結んだ。光一の方も新たな局面を迎えて胸が高まる。ところが、何度もこの河を行き来しているはずの他の客たちでもが、不安げにざわついてきた。

「何か……何か変じやねえか」

「時間がかかりすぎる。いつたい何時になつたら牧草の丘を抜けられるんだ？」

「いつもはこんなじやないよな。もうとっくに『石の国』の最初の

港に着いている頃だ

光一は男達の方に近寄つて聞いた。

「何か……変なんですか？」

船長が厳しい顔で答えた。

「坊主、今あそこには赤い屋根の小屋があるよな。見えるか？」

「ええ、あれですね」

「覚えておいてくれ

船長はやう言つて、そのまま無言で船を前に進めた。他の客も船長と光一のやり取りの後、固唾を呑んで船の行く手を見つめている。船は沈黙を載せて丘陵地を進んでいく。

「やつぱりだ

船長が呻いた。やつきの赤い屋根の小屋が、行く手に現れた。

「やつきから何度も何度もあの赤い屋根の小屋に出来ますんだ

船長は苛立たしげに呟んだ。その船長に客達が口々に疑問をぶつける。

「どうこう」とだ？

「遡つてないつてことか？ 船は進んでくるの？」

「堂々巡りをしてくるような感じか？」

船長はがつぐつと肩を落として答えた。

「あれだ。『時間の環』だ。あれに嵌つたんだ」

しばらく船の上は静まつ返つた。ややあつてから誰かが尋ねた。

「『時間の環』……って何だ？」

「それに嵌つちまつと、同じ時間をぐるぐる回るんだよ。何といつか時間が進まないんだ」

「船でいうと、同じところをぐるぐる回つてゐることになるのか」「そうだ。俺も話だけは祖父ちゃんから聞いたが、こんなのは初めてだ」

船長はさう呟いてから、はつと顔を上げて客全員の顔を見渡す。

「護符を、護符を持つてない奴はいないか？」

誰も答えない。光一が船長に質問した。

「護符と『時間の環』と何か関係あるんですか？」

「『時間の環』が起きた原因は、はつきり一つと決まってねえ。だが、呪の力で起きることもあるらしく」

「誰の呪だよ」

他の客が聞く。

「『生命の河』を遡るんだ。命の流れと反対方向に移動しようつていふんだからな。上りの船っていうのはもともと魔術や呪に掛かりやすい状態なんだ。だから、護符を皆持つんだが……」

男の一人が上ずつた声を上げた。

「お、おいらは護符を持つてゐるぜ。それにおいら、何回もこの河をその護符を持つて往復してゐる。それでこんな目に遭つたことはねえ。だから、だから絶対おいらじやねえよ」

その男がそいつたのを皮切りに荷運びの者全員が口々に同じような主張をした。

「この船に乗るのが初めての奴は……」  
その言葉とともに船上の全員の視線が光一とミツルに突き刺さつた。

「何だよ、わ……僕だって護符は買つてあるよ」

ミツルは大声で早速反論した。

「じゃあそいつの『海から来た者』か？」

光一が何か言つ前にそんな声が上がつた。

「違うだろう。『海から来た者』は皇帝に歓迎される。皇帝の『加護』があつたつていいはずだ」

船長が言つた。

「そうだな。じゃあ、やつぱり案内人の坊主だ」「違う。僕じゃない！」

ミツルの抗弁を誰も聞かない。

「偽物の護符でもつかまされたんじゃないのか？」

「こいつか、こいつの親のどっちかが誰かに恨まれて呪を掛けられているんじゃないのか？」

「とにかくこいつを置いていこう。大体『海から来た者』の案内なんて誰だつていいんだ。誰か俺たちの中で皇都まで荷を運ぶ者がついでにやればいい。船長、今度船を付けられるところがあつたらこの坊主を下ろしちまおう」

「嫌だ！ 降りない！ 降りたくない！」

蒼白な顔でミツルは叫ぶ。光一は自分の胸もドキドキするのを感じた。旅に出ること。それはミツル いやナイアの積年の願いだつたはずだ。差別、いわばイジメから逃げ出し、新しい人生を掴むための。ここで船を降りてしまつたら、彼女の千載一遇のチャンスが失われてしまつ。どうしよう、と考える前に光一は声を出していた。

「あ、あの」

光一はミツルと男達が殺氣立つて言い争つ声に、なんとか割つて入つた。

「あの……僕、僕は護符を持つてません。えつと、そんなのが要るつて知らなくて」

ミツルが呆気に取られた顔で光一を見ている。そして唇を動かして何か言おうとするのを光一は田で制した。

「だから、僕が船を降ります」

「でも、お前が船を降りるならその案内人だつて船を降りてもうう

ぞ。この帝国では理由無く旅はできないんだからな

「ええ。……『めんね、ミツル。一緒に降りてくれるかな?』

「え? あ、ああ

光一とミツルのやり取りに誰かが声をかけた。

「謝ることなんかねえよ。まったく、船に乗るのに護符を持たせておかないと、なんて間抜けな案内人なんだよ」

「やれやれ」

そういうながら、男達はめいめい自分の座り心地のいい所へ散つていった。

しばらくたつて、船から飛び移るのに丁度良しそうな岩が見えてきた。船長は船を横付けて、言つた。

「悪いな。ここで降りてくれ。ただ、ここは『石の国』の国境のすぐ近くなんだ。もし呪が『生命の道』つまり河にだけ掛けられてるんなら、歩きでだつたら国境を越えられるはずだ。河沿いを探せば街道に出る。その道を行けば半日足らずで『石の国』の国境に出るはずだよ。じゃあな」

船は一人を降ろすと、再び河の真ん中へ戻り、風に吹かれて上流へ進む。二人は暫く岸に立つたまま船の行方を追つた。船は広大な河の中をすいすいと運ばれていきだんだん小さくなつて最後には見えなくなつた。そして、一度と姿を現さなかつた。

「なんで嘘なんかついたのよ? あなた護符は持つてたじやない

船の影が消えると、ミツルがぽつりと言つた。

「え？ うーん。でも、ああ言わないと君だけ船を降ろされてしまいそうだつたろう？」

ミツルは何か癪に触るといった表情のまま訊ねてきた。

「『煉瓦の街』でも随分私に同情してくれたみたいだけどね。私に同情なんて結構よ。私は自分の道は自分で開くんだから」

そういうとミツルは河沿いに歩き始めた。光一はミツルの怒りに戸惑いをかくせないまま、きょとんとした顔で彼女の後に従つた。

ミツルは少し肩を張り気味にして早足で歩く。その背を見ながら、光一はこういうことだらうかと考えた。自分がイジメにあつているときも、何人かが解決するために世話を焼こうとした。担任の教師だつたり、保健の先生だつたり。助けて欲しい気持ちはあるけれど、僕は「イジメなんてありません」と彼らの申し出を突っぱねていた。プライド、というそんな輝かしい理由ではなかつたようだ。何だか人の手を借りてしまつと、自分がひどく頼りない人間になつてしまいそうな気がしたから。そんな理由だつた。

今ミツルが光一の手を借りたことに腹を立ててゐるのは、これと似た気持ちがあるからかもしれない。

「あの……」

ミツルが振り向く。

「君のためだけじゃないんだ。僕が、あの入達より君に案内して欲しかつたんだよ」

「どうして？」

「船の上で、僕より前に来た『海から来た者』の話をしてただろう？」

「仕事を首になつて死のうとした人のこと？」

「うん。でも、船の人達はそんなこと大したことない、仕事を変えればいいって話してた」

「それで船の人たちが嫌だつたの？ でも申し訳ないけど私も似たような感想しか無いんだけど……」

「会社つていうのは……うーん、何ていつたらしいのかな。大きな商店みたいな所……これも違うかな。でもまあ、凄く大きな商店みたいなものに勤める人が多いんだ、あっちの世界は」

「ふうん」

「そこから出て行つて一人になるつていうのは大変なんだ」

「そのカイシャ以外に働き先はないの？ 農作物を作るとか荷運びをするとか」

「それはそれで元からそれを仕事をする人もいるし、会社に再就職が出来なかつたら仕事を選んでいられなくて、初めてでもそういう仕事に就くことにする人もいると思うよ。でも……」

そうじやないんだ、と光一地面を見ながら溜息をつく。

「何か一つの集団から外れるととも辛い社会なんだ、あつちは。単に仕事を見つけるかどうかっていうことの前に、その人は自分が所属していた集団から弾き出されたっていう事実が辛かつたんじゃないかなって思う」

ミツルも光一のこの説明には興味を引かれたようだつた。

「一人になると、ただ一人だつていうだけで、掌を返すような人もいるし……。何と言うか、その人がいた社会からは転落したかのよ

うな感じになるんだ」

「はぐれ者、つて感じかしら」

光一はちょっと目を見開いた。

「そうそう、そんな感じ」

「それは確かに辛いわね。村に所属してなくて、胡散臭いものを見るような目で見られて。まるで母さんと私みたい」

「僕もそんな感じなんだ。僕達は学校つていう強制的に文字とかいろいろ覚えさせられる施設に行くんだけど、その中でグループが出来るんだ。でもグループに入れない人間、つまり、はぐれ者なんかは目に見えないかのように無視されたりするんだ」

「似たようなものね」

ミツルは天を仰いだ。

「あつちもこっちも人間で同じなのね。よくわかつたわ。コーライチの話」

「うん、だから僕の気持ちを分かつてもらえる人に案内人になつて欲しかつたんだ。だつて、僕はここに居場所があつたらこっちの世界で生きようつて思つてるわけだから」

「ああ、そうか。私以外の人間が案内人だと『海の源流』から帰るしかなくなつちゃうもんね」

それから柔らかな光を帯びた赤ワイン色の瞳で光一を見て言った。

「私達、似たもの同士だもの。一緒に頑張りましょう。さて、まずは歩いて『石の国』を田舎となきやね」

「うん」

二人は微笑むと歩調を合わせて歩き始めた。そして間もなく細い小道は、きちんと整備された大きな街道に繋がっていた。

## 国境の一人

一人は丘陵地の中を、踏み固められた街道を通りて進んでいった。街道から、少し離れて森がこんもり茂っているのが見える。ミツルは「あんなに木が一杯生えているのは見たこと無い」と言いながら眉間に皺を寄せてその森を見つめている。そんな物珍しげなミツルの様子が光一には面白かった。

街道が丘陵に合わせて登りになり下りになつたりする。それに合わせていつの間にか前方に灰色の大きな壁が見え隠れするようになった。

近付くと、その壁は大きく長方形に切り出された石を積んで造られているのが分かつた。壁の端の方は良く見えない。うんと遠くにある青い山影に吸い込まれるようにただ延々と続いている。

街道はその壁に穿たれた大きなトンネルに続いている。そこに鎧をつけた兵士が立つていて、出入りする者達に声を掛けていた。これが「石の国」の国境のようだった。

光一は不安になつて、石壁のそばまで行く前に足を止めた。ミツルが怪訝そうに振り向く。

「あの人……。僕達は、呪つていうのを掛けられて、船では『石の国』に入れなかつたんだよね。ここはどうなんだろう？ 入れるのかな？」

「入ろうとしてみなきや分らないじゃない」

「そりやそうだけど……僕、まだ状況が飲み込めてないんだ。こちらの世界に呪つていうのがあるんだね」

「みたいね。私も本でしか知らないけど」

「……どこかでこんなやり取りしなかつたっけ？」

「多分、乗船場の護符売り店の前でしたわよ」

「そうだ、護符！ あれ僕達一人とも買ったのに駄目だつたつてこと？」

「そうみたいね」

「でも、他の人たちは護符があるから大丈夫って言つてて、事実僕達が降りたらちゃんと河を遡つていけたんだよね？」

「そうね」

「（）でやつと（）は光一に向き直つた。

「あなたか私、あるいは両方に呪が掛かっているのかも知れないわね。護符が守りきれないような呪が」

「護符が守りきれないって……」

「前に、河沿いの『土の国』『石の国』『森の国』以外に、河から離れたところにいろいろ蛮族がいるって話をしたでしょう。その全てが知られているわけじゃない。皇帝に従つてるのは一部の蛮族に過ぎないわけだし。だから未知の蛮族が何か私達の知らない呪を用いることはあると思う。知らないものは防ぎようないでしょ」

「まあ、そうだけど。でも、話からするとその蛮族の人たちつて河から遠いところにいるんだよね？ そこからでも掛けられるものなの？ それにもっと根本的な問題として、僕達に掛ける理由があるの？」

「私に聞かれたってわかんないわよ。もう一つの可能性は、船長も言つてたように皇都の貴人の誰かが掛けているのかもしれない。皇帝は『海の源流』を護る存在なの。その皇帝に連なる貴人の位によつては、ただの護符を破る程強い呪を河に掛けることもできるかもしれない。ただ、それがどうして私達なのかはやっぱりわからない」

「そもそも呪がかかっているのが、僕なんか君なのか、あるいは両

方になのかもわからんないよね  
「私ってことはないと思ひけど……」

ミツルは困惑した顔で言ひへ。

「でも、僕だつて……。僕も自信がないけど、君のお母さんや船の人の話では『海から来た者』は皇帝に歓迎されるそうじゃないか」「あなたが『海から来た者』の中でも特別だつたりとかするかもしれないわよ?」

「特別つて……? 例えば?」

「……それは……わかんないけど」

「それじゃあ……」

不安げな顔で光一は更に言ひ募らうとする。けれども、ミツルは苛立たしげな様子を隠さず、強い口調で遮つた。

「とにかく

ミツルの語氣に押されて光一は口を噤む。

「私とあなたである国境の門をくぐつて見ましょ。そしたらまた考える材料が出来るじゃない」

「でも……」

「んもうつ」

ミツルが腰に手をあてて大きな声を出した。

「ウジウジ悩んでたつて仕方ないでしょー!」

「だつて……」

「じゃあ、早いとこ試してみて白黒つけましょ。駄目だつたらそ

の時はその時よ

「その時つて……駄目だつたらどうするの？」

ミツルは盛大に溜息をき、そして光一に壁を指差して見せた。

「夜にでもこいつそりここの壁を登ればいいじゃない。私が本で読んだ歴史書によるとね、共に帝国の配下に下る前に『土の国』と『石の国』が戦乱状態だったことがあるの。この積み石の古さからするときっとそのときに作られた古い城壁だと思うわ。この壁、高さが余り無いでしょ。騎馬の進入を防ぐのが目的だから」

確かに、この石積みの壁の高さは光一たちの身長の一倍弱といった感じだった。ロープとか調達すれば乗り越えるのは不可能ではないかもしない。

「君つて凄いなあ」

光一は歴史の勉強が苦手だつたから、自力で歴史の知識を身に付け、更に田の前の事態に当てはめられるミツルを素直に賢いと思った。そして、ござとなつたら乗り越えてしまえ、なんて考えつく大膽さにも感心した。ミツルには頭脳も度胸も備わつていて。

「凄いよ」

光一は心から感心して繰り返した。ミツルは満足そうにこゝんまりと笑うと

「さ、行ってみましょ」

と歩き出した。

「 行くわよ」

ミツルは光一の腕をひつかみ、兵士が守るこの国への入り口に向かう。

「 やあ、君たち。ちょっとといいかな

気がつかなかつたが兵士の隣に小机があつて、いざつぱりとした身なりの男が座つていた。手招きされて一人はその小机の前に立つ。

「ええと、まずお名前は?」

男は何か書類に書きつけながら光一とミツルに質問する。どうも入国審査の係員といったところらしい。

「僕は『煉瓦の街』のミツル。浜で『海から来た者』を拾つたので皇都に向かっているところです」

落ち着きすぎているほど落ち着いて、ミツルが淀みなく説明する。「拾つた」なんてまるで物扱いなのは気に掛かるが光一も続けて自分の名を告げる。

「あの、『海から来た者』の光一です」

「へええ」

入国審査官はじいと光一の顔を見つめている。

「君が『海から来た者』かあ。会つたことがある人間なら知り合いにいるけど、僕が実物を見るのは初めてだなあ。やっぱりのっぺり

しているんだね」

とは言つが、この入国審査官も周りにいる兵士も「土の国」の人間ほど彫りは深くない。日本人でも「濃い」顔、ちょっと昔でいう「バタ臭い」顔なら、こここの国の人と並んでも違和感がないかもしれない。肌の方は透き通るほど白くて、これは日本人とは違うけれども。そう言えば、ミツルの顔立ちも「土の国」より「石の国」の人には近いような気がする。お母さんはもともと「石の国」の人だったのかな。

そんなことをぼんやり考えていた光一は、次に入国審査官が何気なくした質問に、一気に冷水を浴びせられたような気がした。

「どうして『海から来た者』と案内人の君がこんなところにいるの？」『煉瓦の国』から皇都行きの船に乗らなかつたのかい？」

時間の環については言わない方がいい。でないと怪しまれる。二人は顔を見合わせ、このことを目だけで確認する。

変に目をつけられてしまつと、ミツルが男の子の格好をしていることや、名を偽つてゐることまでばれてしまうかもしれない。これがばれれば、ミツルは「砂浜の村」に、光一は「海の源流」に直行だ。それは困る。

「船には乗つたんです」

ミツルが答えた。光一はそつとミツルの顔を伺つ。かすかに顔を強張らせてゐるが、ミツルはすらすらと答えた。

「でも、僕、船に乗るのが初めてだから気分が悪くなつちやつて。

それで途中で降ろしてもらつたんです」

「ああ、船酔いしちまつたんだな。そりや大変だつた。じゃあ、ま、この街で休んでまた船に乘るんだね。乗つてゐるつまに慣れるものだよ」

入国審査官は引き出しの中から地図を取り出して、リト寧にこの国境の門と最寄りの船着場に丸をつけてミツルに差し出した。

ここを通り抜けられても、船に乗つたらまた時間の環に嵌るんじやないだろうか。乗るたびに時間の環に嵌つていたら、光一とミツルの二人連れは人の目を惹いてしまうだろう。

「あの……その船酔いつて本当に辛くつて。だから、船以外に皇都まで行く方法はないでしようか。例えば歩いていくとか」

ミツルが本当に困つた顔をし、苦しそうに手を胸に当てて入国審査官に訊ねる。

「皇都まで歩いていくつて？ タアてそんな奴聞いたことないなあ。船に乗りなさいよ。『石の国』はいろいろ産業が盛んだからさ、街ごとに港があるんだ。ちょっとずつ乗つて、気分が悪くなつたら降りて休めばいいよ」

「でも……あんな気持ち悪い思いなんか、もうしたくない……」

ミツルは眉間に眉を寄せ、吐き気を抑える仕草をしながら訴える。

「うーん。まあ、街と街の間には当然街道があるからなあ。それを歩いて『石の国』の中を皇都の方角に向かうことはできるがねえ。ただ、『石の国』と『森の国』の間にはとても高い山脈が聳えていてねえ。普通の者はまあ山越えなんかせずに船に乗るもんだよ」

「普通じやない人は山を越せるんですか

と光一が尋ねた。富士山くらいなら、しつかり装備などを整えておけばなんとか越えられるかもしない。小学校の時、家族旅行で富士山に登つたことを自慢していたクラスメートがいたことを彼は思い出していた。

「何か事情のある人間。まあ、犯罪者だな。そいつらが逃亡「するときに使つ。手配書は真つ先に河沿いの港に出回るからね。そうそつ、それから皇帝軍が山を越えて進軍することもある」

「河を使わないで？」

「そう。その時々の編成によるけどね。大編成の時には馬やら大砲やら寝泊りする天幕やらいろいろ持つていくから大きな軍の船を使つ。でも国境の巡回くらいなら、兵士や馬の鍛錬を兼ねて少なめの編成で山を越えることもある」

「…………」

光一もミツルも考へてゐることは同じだつた。それなら自分たちだつて山越えができるかも知れない。しかし、そんな一人の考へを見通すように入国審査間が言つた。

「言つとくけど山越えは危険だ。訳ありの者が通る道だ。おまけに皇都で何か金目のものを盗んだ奴も通るからそれを狙つた山賊も居る。子供一人で越そうなんて危険すぎる」

「わかった」

ミツルが頷きながら言つた。

「『石の国』を歩いて、あとは船に乗ることにする」

「そうそう、それが無難だよ」

それじゃ、と入国審査官はトンネルの出口をペンで指し示した。

「『石の国』によつてさ」

ミツルは自然な笑顔で、光一はややぎこちない笑顔でそれぞれ会釈してトンネルの出口へと向かった。

「じゃ、私が先に入るわよ」

当然の「」とミツルはそう宣言すると、暗いトンネルから明るい陽光の注ぐ外へ踏み出した。何も変わったことは起こらない。

「……それじゃ、僕も」

田を瞑つて光一も日差しの中に飛び込んだ。そして何も変わったことは起こらない。

「……大丈夫つてことかな？」  
「もう暫く歩いてみましょ」

ミツルが先に歩き出した。道路は四角い平らな石で舗装されていた。アーチを多用した石造りの建物が街道沿いに続いている。いくつかの建物はテラスを持ち、ヨーロッパのオープンカフェのように店の外にも椅子とテーブルが並べられていた。

いかにも旅人といった風情の、ちょっとぼさぼさの髪と草臥れではいるが頑丈そうな靴の若い男が、大きな荷物を脇に置いてマグカップで何かを飲んでいる。この街の人らしい普段着の老夫婦が、ガラスの器で鮮やかな黄色のお茶を飲みながら談笑している。休憩の

時間になつたらしい兵士が椅子の一つにぎりつと座り込むと、おおい、と店の者を呼んだ。

休憩中の兵士の注文を取り終えた店員を、ミツルが捕まえた。

「あの。僕達『海から来た者』とその案内人なんですけど、ここでお茶か何か飲めますか?」

五十がらみの頭のはげた店員 いつも店主のようだ は珍しげに光一の顔を見、それからこりやかに答えた。

「ええ、できますよ。確か帝国府が後で払ってくれるんですよ。大丈夫です。どうでも座つて下さい。今日はナキュールのお茶がお勧めですよ」

「じゃあ、それを一つお願ひします」

そう言つてミツルは手近の椅子に腰掛けた。同じテーブルに光一も腰を下ろす。

「今のところ、特に時間が巡つたりしてなさそうですね」

「そうね。上手くいってるみたい」

店主がお茶を運んできた。向こうの老夫婦の楽しんでいる鮮やかな黄色のお茶だった。

「甘いねー」

光一はそのお茶を一口啜ると嬉しそうに小さく叫んだ。今までの食事や飲み物は決して口に合わないことはなかつたけど、質素で味の楽しみとか考えられていないものばかりだった。

「ナキユールつていののはつる草よ。葉を干してお茶にすると黄色い色が出る。濃く煮出すと染料にもなるわ。甘みはつるの部分にあるの」

「『土の国』にもあつた?」

ミツルはコップに口をつけたまま首を振る。

「母さんの本に書いてあつたの。母さんの本には植物に関するものが多くつたのよ。本で見ただけで私も実物を飲むのは初めて。本当に甘いわね」

甘いものは人を幸せな気分にする。光一は珍しく樂観的な予想をした。

「もう大丈夫そうだね」

「そうね、きっと大丈夫」

ミツルもにつこり微笑む。緊張のほぐれた彼女は、男の子の格好をしていてもやつぱり可愛らしい女の子だった。

「結局、呪は河にしか掛かつてないみたいね。無事国境を越えられたから、呪が私に掛かつてたのか、あなたに掛かつてたのか、それとも両方になのかはわからないままだけど」

「まあ、しばらくはこのまま『石の国』を歩いて『森の国』を田指せばいいんだよね」

「そうね。『森の国』に入るのはどうするかは問題だけど。まあ、『石の国』でいいところが見つかつたらそこで旅を止めればいいわけだし。とにかく先の話よね」

時間の環に嵌つて以来、旅の行方が怪しくなつて二人は緊張の連

続だった。もう、今日はここでやつたりと寛ぎたい。田舎とここミツルはこの店の入り口にベットのマークが掲げられているのを見つけて。今夜の宿はここで決まり、だった。

## 強いられた旅

先ほどの店主が宿の主でもあった。主は、ミツルが「浜辺の者」とは知らないので、一人を三階建ての建物の最上階にあつて見晴らしの良い、宿の中でも上等な部屋に通した。「何か不便なことがあつたらなんでも言って下さいよ」と愛想笑いを残して彼は去つていった。

きちんと支度されたベッドに早速ミツルが仰向けに倒れこむ。

「すつゞーい。こんなにふかふかなベッドなんて初めてよ」

今まで見た中で最も無邪気な笑顔で彼女は感嘆の言葉を洩らした。それからベッドの上を嬉しそうに口々口々と端から端まで転がつて楽しんでいる。

光一も腰を下ろしてみた。そして少し怪訝な顔をする。いや、確かにこのベッドは快適といえば快適なんだろうけど。でも日本で家族旅行のとき泊まるホテルのベッドなんかもつとスプリングが効いているし、木製の枠に布団を敷いた自室のベッドだってもうちょっとふわふわしていたような気がする。

それでも、ミツルがこのベッドに有頂天になる気持ちも分かるのだ。崩れそうなほどみすぼらしい「砂浜の村」の家。馬糞の匂いと馬のいななきのせいで熟睡できなかつた「煉瓦の街」の馬小屋。光一にとつてそんな貧しい宿は珍しい体験だけれど、ミツルにとつてはそつちが日常だつたのだ。

ミツルは今度はうつ伏せで綿のシーツにほお擦りしている。相変

わらず嬉しそうだ。光一と曰があつと、にひにひと可愛らしく微笑む。それにつられて光一も頬を緩めた。

ベッドで一通り遊び終わって満足したミツルは、今度は窓から見える景色に夢中になつた。

「随分高いわねえ」

ちょっとだけ身を乗り出して宿屋の建物の真下を見る。さつきまで座っていたテラスのテーブルや椅子が小さく見えた。

「ちょっと……高くて……何だか怖いわ。こんなところで眠れるかしら?」

ミツルは眉を寄せて光一に問いかけた。その様子が本当に不安げで光一は少しばかり驚く。船長や入国審査官の際どい質問にも、ミツルはいつも冷静沈着にそれらを上手くかわしていた。壁があつたら乗り越えてしまえ、なんて思える度胸もある。そんな強い彼女が、たかだか三階建ての高さに怯えるのは意外だった。

「そつか……。君はあの砂浜の家か『煉瓦の街』の馬小屋しか知らないで高い建物は初めてだもんね。大丈夫だよ。この建物は石造りで頑丈なんだから。寝てる間に床が抜けたりなんかしないよ」

それから光一は、自分の元居た世界には三階どころか百階近い建物だってたくさんあるんだ、と話した。ミツルはただただ感嘆のため息を洩らすだけだった。

「いろんなものが見える。見たことないものばかり」

ちょっと神妙な口ぶりでミツルが言った。

「あれが……山？」

ミツルに続いて光一も身を乗り出して景色を見た。一人が通つてきた城壁の向こうはなだらかな丘陵地で、この宿屋も含めた街並みもその地形に乗つてている。けれどもこの穏やかな地面は、街の外れでこんもりとした山々に取り囲まれるようにして、その先を阻まれていた。

緑鮮やかな手前の山の奥には、深みがかつた緑の山が続き、さらには連綿とした山影が奥に奥に幾重にも重なつていて。最奥に見える峰々は青く波打つ平面的な影となつて見渡す限りの地平線を縁取つていた。

隣でミツルが小さく溜息をつく。山肌に迫る城壁や人家と比べて見て、ミツルは「山」とは「丘」よりもずっと大きいものなのだ、と納得したようだった。

「私、こんな景色を見るの初めて……」

そう呟いたまま、彼女は窓から離れようとしない。山々を照らす陽射しが傾き、空がすみれ色から群青色へ変じ、それにつれて山々が黒々とした塊に姿を変えて、ミツルは飽きることなく窓からずっとその光景を見つめていた。

「おいしぃ」

夕食を一口食べたところでミツルが小さな歎声を上げた。彼女の赤ワイン色の瞳にもしつかりとした喜びが浮かんでいる。

「『石の国』じゃ香辛料も沢山とれるって本で読んだことがある。でも今日、森や山を見て実感したわ。『土の国』じゃ植物は人間が手を入れないと育たないけど、この『石の国』じゃあれだけ草木が勝手に生えてるんだもの。香辛料、だって一杯取れるわけよね。そして、同じ肉料理でも香辛料があるだけでこんなに美味しいくなるなんて！」

ミツルはもう、うつとりとした顔をしている。ただ、それを見て光一は複雑な気持ちになる。

今までこちらの世界の食べ物を特に不味いとは思わなかつた。といつより、味のことなんか考えてられなかつた。せいぜい異世界でもどりあえず食べられるものが手に入るのに安心したくらいだつた。

確かにこここの宿屋の夕食は今まで食べてきたものに比べれば断然洗練されていふとは思うけど。でも、光一が東京で両親と食事に出掛けたレストランの料理と比較するならば、かなり大雑把な料理に思えた。

「何、コーキチ。美味しくないの？」

「……ええと」

光一が言葉を選んでいる間に、ミツルはさつやと覗きをつけてしまつた。

「あちゅうの世界の料理の方が美味しい？」

「……う、うん」

ふつと息を吐いてミツルは光一に尋ねた。

「何だかあちらの世界はいい所のようだと思えるんだけど。お料理は美味しいし、あちこち旅行に出掛けられて、学校とやらでは字や勉強を教えてくれる。なんか私からすれば理想郷に思えるわ。それでもコーエイチは帰りたくないの？」

ミツルのその問には、光一がこの宿に入ってきた時からずつと考えてきたことに近いところをついているように思われた。

「確かに……。僕は君に比べて恵まれてたと思う。……。」このベッドより気持ちいいベッドで寝ていたし、このお肉より美味しい料理だつて一杯食べてきた。それに、僕の父親は旅行が好きで……。登山もよくしたし、海にも行つた。それから向こうには、動物とか植物とかいろいろ珍しいものを見物するための施設があつて、親と一緒にいつたり、学校の行事で行つたこともたくさんある。だから、僕は君より恵まれた生活をしてたし、君よりもつとこうんな物も見聞きしてきた……とは思つ」

本当に自分は恵まれていた。光一はそう思つ。でも 今こゝで比較しているミツルが持つているものを、自分は持つていな い そんな気がしてならない。

文字を知ることも旅をすることも禁じられて、それでもミツルはあの廃屋のような家で、床下に隠されていた書物をおそらく一心不乱に読み耽つてきたに違いない。その様子は、きっと喉の渴いたものが水を求めるかのようなものだつただひとつ光一は思つ。

念願かなつて「海から来た者」が現れ旅に出ることになり、ミツルは今まで書物でしか知らなかつた世界を目の当たりにしてくる。

その姿は、いつも瑞々しい興奮に満ちており、新しい発見を身体全体で喜んでいるように見える。そしてそこには、光一の知らない幸福があるように思えるのだ。

「どうしてなのかな？」

光一は自問したつもりだったが言葉は外に出てしまい、当然ミツルは怪訝な顔をする。

「なにが？」

「君を見ていると、確かに旅や勉強は本来楽しいものなんだろ？」「つて思えるんだけど……」

「楽しくなかったの？」

「……楽しさを感じる自由がなかつたというか……。上手く言えないと、いんだけど」

光一は食べるのをとっくに止めてしまい、自分の考えを探ることに専念していた。

「旅行だつて子供の頃は単純に喜んでいたけど、今じゃ親が行きた  
いっていうのに付き合つ、みたいな感じだし。学校は……小さな時  
から行くのが当たり前のものだし。勉強だつて、何を知りたいか自  
分で考える前に勝手に教えられるんだ。それに勉強するためには学  
校の教室つて部屋に詰め込まれて、そこでの人間関係に神経を磨り  
減らなきやならないし」

「学校つていうのに行かないわけにはいかないのね？」

「いかない。ちょうど君たちが旅にでちゃいけないのと同じように  
「いつも群れてないといけないわけね。うーん。それって、牛や羊  
がたくさん柵の中に閉じ込められているような感じかしら？」

「…………」

「家畜つて最初から最後まで人間の目的に合わせて生きるでしょ。で、畜舎にこぎゅうぎゅうづめにされて、餌だつて食べたいかどうか構いなしに強制的に与えられる。ときどき放牧されるけど、群れでないといけない。逃げ出さないよう飼い主が見張つてるしね」「まあ、確かに家畜みたいなもんだね……」

光一が暗い気持ちでいる間に、ミツルはまた別の考えが閃いたらしい。

「でも、また話を元にもどして悪いんだけど。群れからはぐれて一人ぼっちになつても、それでも構わないほど楽しいと思えることや勉強したいことがあればいいんじゃないの。要は貴方の意欲の問題で。貴方にしたいことや学びたいことはなかつたの？」  
「…………」

光一はテーブルの上に視線を彷徨わせながら自分の心を探つてみる。子供の頃の他愛ない夢はともかく、大きくなるにつれて何かになりたいとか、何かを知りたいとかそういう欲求からは遠ざかってしまったような気がする。それに、最近のあちらでの毎日はイメージを遣り過ごすのに精一杯で、そんなことを考える余裕なんてなかつた。

「……考えたことがなかつた」  
「今も？」  
「今は……。こちらの世界でどこか居心地のいいところを探してみたい、つて思つてゐる」

光一の言葉にミツルははつと何かに気がついた顔をした。危ない、危ない。ミツルは自分が重大なミスを仕出かすところだったのに気がついた。光一に「あちらの世界でやりたいこと」を見つけ

られるに困るのだ。だって、ミツルが旅をするには光一が必要なんだから。

「そ、そうよね。」さちでどこかいいところを探しましょう」

ミツルはグラスを持ち上げ、光一に微笑みかけた。

「とにかく、『土の国』脱出成功おめでとう。私達の自由に乾杯！」

光一も慌ててグラスを持ち上げて応えた。

「乾杯」

そうして二人は出でくる料理についてあれこれ喋りながら夕食の時間を過ごしたのだった。

朝食をとりにテラスへ出た光一は、空を見上げた。

空の色は、砂浜から見上げたときよりも一層青みが深くなっている。ところどころに浮かぶ雲の口にあたる部分はくっきりと白く、青々とした空と見事なコントラストをなしている。一方雲の陰になつている部分はどんよりとした鼠色で、そのため雲はしっかりと立体的な存在感を示していた。

「もう夏が来るね……」

光一の言葉に、ミツルも光一を真似て空を見上げる。けれどどこに着目すれば夏の予兆を捉えることができるのか分からぬのか、大真面目な顔で天を仰いでいる。

「『砂浜の村』の時より空の色が青いだらつへ、雲も大きいしモソモソしてゐる」

「ああ、そうね」

それから、と光一はテラスの方を見た。ミツルもそれに倣つ。

「陽射しが強いから、建物や木の陰も濃くなつてゐる」

「本当！ はつきりしてゐるわね」

ミツルは自分たちの席をわいつと決めると、椅子を引きながら言った。

「日の光が強くて、眩しいから」

けれど、ミツルのその笑顔の方が光一にはよほど眩しかつた。今日も彼女は新たな発見の喜びに満ちている。

運ばれてきた朝食も、光一には黒っぽいパンから白いパンに変わつただけのような気がするが、彼女は物珍しげにしばらく手にとつてあれこれ角度を変えながら眺めている。

「今日は夏物を買いに行こうか」

朝食を前に浮き立つ氣分で光一がミツルに提案した。

「夏物つて、袖は半分までの服のこと？」

「そうだよ。それから帽子も要ると思う」

「帽子は、頭に被るものよね。日除けの為に」

光一の言葉に、いちこち頭の中で事典の頁を繰つてこらしはじめる

ツルの姿がおかしかった。

「『砂浜の村』にははっきりした夏がなかつたんだろうけど、ここから先は暑くなりそうだからね」

うん、と神妙に頷いてから、ミツルは朝食に取り掛かった。ひどく眞面目な様子が光一には微笑ましかった。

服屋で夏物の服やつばの広い帽子を買い整え、その店のドアを閉めたとき、ミツルがふうーっと長い溜息をついた。がっかりした様子は隠せない。今度はドアから一、三歩離れて窓から店の中を覗き込む。でもそれもほんのわずかの間のことで、やっぱり氣落ちした様子でドアの前で待っていた光一に近付いてきた。

「よつほど欲しかったんだね。あの服

もう一度溜息をつくと、ミツルは悄然と歩き出した。光一もそれについて行く。

「分かつちやつた?」

「うん。でもお店の人にはわからなかつたと思うよ」

「そりやそうよ。手に取るどころか、遠くからひりひり眺めてだけなんだもの」

店から離れて、ミツルは三度目になる大きな溜息をついた。

「素敵なドレスだつたわ……」

宿の亭主に教えてもらつた服屋はすぐ分かつた。石積みの建物だが扉の横だけ四角く漆喰を塗り、そこに色々な形の服の絵が書いてあつた。文字のないこの社会ではこれで看板とするようだつた。

明るい緑色に塗られた扉を開けると、真正面の奥のほうから「いらっしゃい」と声が掛かつた。夏に近い日差しの明るい通りから、暗い部屋に入つて目が慣れるのに時間がかかつたが、ドアの真向かいに机があり、そこに男が座つてているのが見えた。

「ひょっとしてお客様、『海から来た者』でいらっしゃるのですか？」

やはり光一の顔は珍しいものによづらしい。光一は質問される前に説明を始めた。

「あの、案内人が船に弱いものですから途中で船を下りたんです。それで、この街で休養しながら夏の支度を整えようと思つて」

男は立ち上がつた。店内は広く、店の右側は男物で左側は女物と分かれていた。男は右側の方に歩きながら光一に話し掛ける。

「二人とも階格好が同じくらいだから、同じようなのを一人分用意したらいいでしょうね」

そういうながら、棚から衣類をあれこれ引っ張り出して並べる。ミツルはすっかり男の子だと思われているようだつた。「良かつた」と田でミツルにそう告げようとした光一は、ミツルが何かを気にしているのに気付いた。彼女はちらちらと他の物にもせわしなく視線を巡らすものの、結局は一箇所を見よつとしている。

綺麗なワンピースが、人の形をした木の板に着せられていた。落ちていたピンク色に、全体に優しい色合いの花柄模様が散っている。布地は随分柔らかいものようで、腰から下は空気を孕むようにふんわりと拡がっていた。襟元には派手過ぎない上品なレースがあしらわれていて、本当にとても女の子らしい可愛い服だった。

ミツルの顔をよく見れば、彼女がその服に駆け寄つて手に取りたいたと思つてゐるのがわかる。けれど、少年の格好をした今、そんなことができるはずが無い。もちろんそれは当の本人が分かつていて、ことで、だから一生懸命見ない振りをしているのだった。

店主が見繕つてくれた夏の衣類と帽子一人分を抱えて店から外に出て、やつとミツルは落胆した顔を隠さなくて良くなつた。そしてミツルは出会つて初めて光一に愚痴を零し始めている。

「とても可愛らしかつた……。共衣のリボンもついてたわよねえ」「いや、僕はそこまでは気がつかなかつたよ」「そお？ あの服で髪を結つてそのリボンを付ければきっとても素敵だと思う……あ、でも髪切つちゃつたのよね……」「髪なんて、また伸びるよ……」

光一はなんとか励まそつとする。女の子の服に対する思い入れに詳しいわけじゃないけれど、とにかくミツルを元気にしてあげたかった。

「皇都に行くまでに、どこかいいところが見つかつたらまた女の子に戻ればいいじゃないか。ていうか、ずっと大人になるまま男の格好つてわけにいかないし。いずれ必ず女の子に戻る日がくるよ」

「そう、そうよね」

「それにここは国境の街なんだろ？ きっと首都にいけばもっと沢

山服屋があつてさつきのよりもっと可愛い服が売つてるかもしだいよ」

ミツルが突然光一の腕を両手で掴んだ。女の子にそんなことをされるのは初めてで光一の顔は真っ赤になる。もつとも、彼女はそんな彼のことなど全然気に留めない。

「コーライチつて頭いいわ！ そうよね、あともう少し頑張つたら私達自由になれるんだものね」

更に顔を赤くする光一に構わず、そして光一とは全く別の理由でミツルはその頬を薔薇色に染めていた。

「あの、」

夕食を一階の食堂で済ませた光一とミツルに宿の主人が話しかけてきた。この街のあちこちを買い物したり散策したりして過ごして、何日かが経っていた。彼は少しばかり言いにくそうな口調だつた。

「あの、気を悪くなさらずに聞いていただきたいのですがね。一体いつまでこちらに滞在されるのですか？」

「もうちょっと」とようかと思つてますが……何か不都合なんですか？」

ミツルが尋ねる。

「不都合なのは私というよりも、お客様の方では……。お客様は京都に向かう旅の途中なのでしょう？ お急ぎにならなくていいので

すか？ 特に」

宿の主人は光一の方を見て続けた

「『海から来た者』でいらっしゃるあなたの方は、あちらでお待ちの方もいらっしゃるでしょう。こんなところでゆっくりしている場合ではないのでは？」

とはいへ、五十がらみの大人の彼は人それぞれ事情があることくらいは分っているようで、それ以上光一達の都合については突っ込んで訊いてこなかつた。その代わりに自分の事情を説明する。

「こちらといたしましても、あなた様達のご滞在の代金をですね。帝国府に申請して交付してもらうのに、あまりに長逗留でござりますと……。旅の目的からみて不自然に長い日数分を請求致しますと、請求する私が疑われてしまふわけでございまして……」

宿屋の主人の言いたいことは「一人にもすぐわかつた。二人が滞在した日数分を帝国府に請求しても、余りにそれが多いと宿屋の主人が架空に水増し請求しているのではないかと容疑を掛けられかねない宿屋の主人はそう訴えているのだ。

「わかつた。じゃあ明日出発するよ

ミツルがそう答え、光一も頷いた。

「僕達はこの旅を『しなくちゃなんない』立場なんだね。権利じゃなくつて義務として」

「やうじつ」とね……

一人はそれぞれのベッドに腰掛け、伏目がちに言葉を交わした。

「Jの旅は真っ直ぐ皇都を目指さなければならない。一箇所に長く留まることはできないし、皇都を目指すルートから外れることもできない。もし皇都に向かうのに不自然なほど長逗留をしたり寄り道をしたりすれば、宿にも泊まれないし物も買えない。宿屋も店も後で帝国府に請求書を出して通らないとわかつていれば、二人を客扱いするはずないのだから。

具体的な目的があつたわけではないけれど、二人は何となく、この先気に入つたところがあつたらそこで旅をやめて暮らして行こうと思っていた。そんなことをただ漠然と思っていただけで、今まで二人は単純に「土の国」を出て得られた「自由」を楽しんでいたのだ。

しかし、このままでは、一人に皇都まで最短最速で向かい、そして光一は『海の源流』からあちらの世界へ、ミツルは僅かの報奨金を貰つて「砂浜の村」へ戻るしかない。

ミツルは唇を噛み締めて床を見つめていた。時折その両目に涙がこみ上げる。零れ落ちそうになるたびに彼女は乱暴に拳で顔を拭く。光一も暗い顔で俯いていた。またあちらの世界に戻るのか……。彼は何度目かになるか分からぬ溜息をこぼす。一人ぼっちで誰にも顧みられない、そんな扱いをうけるあの世界に……。

「ちょっと

しばらく経つて、ミツルが声を上げた。彼女は中空の一点をきつと睨み据えている。彼女の赤ワインの瞳に強い光が宿り、炯々と光つていると感じられるほどだった。

「ただ声が裏返つてしまつたので、もう一度息を整えてから彼女は言葉を続けた。

「ちょっと、思いがけない展開になつただけよ。今まで予想してなかつただけ。考えたことがないから分からなければきつと分かることが出てくるわ」

彼女は乱暴に毛布をベッドから剥ぎ取り、荒々しく中に入り込んだ。

「もう寝ましょ。うじうじ考えていたつて仕方ないもの。今は驚きが大きすぎて、落ち着いて考えるところまで頭は回らない。明日になればまた局面が変わるわ。明日思いつかなかつたらまた明日。いつかいい考えが浮かぶかもしれない」

光一もベッドに入つた。ミツルのこの旅への思い入れは光一よりずっと深い。来るかどうかわからない「海からきた者」を待ち続け、手に入るだけの知識を頭に叩き込み、何より「自分は絶対自由になつてみせる」という強い意志を鍛えてきたのだから。大丈夫だ。彼女がいれば。彼女が何か見つけてくれる。いや、自分も一緒に探そう。

光一は大きく息を吐いた。とにかく明日だ。明日思いつかなければまた明日。今はとにかく落ち着いて、その明日か、明日の明日に備えよう。

二人はそれぞれ手元の灯りを消した。部屋は暗くなる。けれども、二人ともなかなか寝付けなかつた。特にミツルの方は、ああ言つていながら今すぐ名案を思いつきたくて仕方がない様子で、何度も何

度も寝返りを打っていた。光一の方もそんなミツルの様子を見るとやっぱり考え込んでしまう。

一人はそのまま暗い部屋で目を開けていた。窓から差し込む月の影が微かに部屋を照らす。ミツルは寝返りをやめてそのかそけき光をじいっと見つめ、光一はそんなミツルを見ていた。二人は、その月光に慰撫されるようにして、少しづつ眠りに入つていった。

## 「石の国」の山道

「うしょり……。光一は坂を登りながら狼狽していた。ミツルをなんとかしないと……。

国境の街から次の街まで歩いていくには、山を越えなくてはならない。もっとも大した山ではない。光一の子供の頃、家族連れてハイキングを楽しんでいたような山と同じくらいの高さしかない。けれども山の中腹で、すでにミツルは倒れこみやうになっていた。

「砂浜の村」で生まれたミツルは坂道といつもの全く知らないおまけに季節は夏に掛かろうとしており、光一にはともかくミツルにとつては未知の暑さだった。彼女は、山道を登り始めてものの五分で、顔が紅潮し息が上がってしまっていた。それでもここまで苦しいとも何も言わず登り続けてきたのはさすがミツルらしい頑張りようだった。

けれど、もう限界だらう。さつきから何度も躊躇っている。もう疲労で足が上がらないのだ。光一は立ち止まつてミツルに声を掛けた。

「ねえ、ミツル。休もうか」

「……つこわつき……休んだばかりじゃない……。早く……山を越えないとい……日が暮れてしまうわ……」

日は正午を過ぎて西の空に傾きつつある。今からどれだけ急いでも山越えは無理だ。ミツルはもう、そんな冷静な判断を失うほど疲れていらんだらうか。じゃあ、僕はどうしたらいいんだらう。ミツルは隣で膝を抱えてうずくまり、はあはあと肩を上下させてくる。そんな彼女を見下ろしながら、光一はますます困惑する。

「インヨーの木……」

ミツルが呟く。

「へ？」

「インヨーの木が沢山生えているところまで頑張って歩く。私

ミツルが立ち上がり、やや覚束ない足取りで先に立つて歩き始める。それを気遣わしげに見ながら光一は尋ねる。

「インヨーの木、って何？」

「枝が地面に垂れ下がっている木よ。今まで何本か生えてたけど。気が付かなかつた？」

「ああ、あの柳みたいな木……」

確かにそんな木を何本か見かけていた。その木は柳に似ていた。ただ柳よりも幹が太く、枝のほうも途中までしつかりしているのか、柳よりも幹から離れたところから枝が垂れ下がり始める。光一は何となく、柳と枝垂桜の中間のような木だと思つていた。

その木のところまで歩いてどうするの？と光一は訊いてみたが、つたが返事をさせるのもミツルの負担になりそうで黙つてミツルに会わせて歩いていた。

そのインヨーの木が群生しているところへくると、ミツルはどう倒れ込んでしまつた。

「大丈夫？」

光一はミツルの傍にしゃがみこんで訊いた。ミツルは仰向けになつて、ほつとした表情で答えた。

「大丈夫。これだけインヨーの木があれば今日はここで野宿すればいいわ」

「？」

「この木を2本使って、お互いの枝を編み合わせるの。そうしてゆりかごのようなものをつくるのよ。その中で寝れば獸に襲われないし夜露にも濡れない。だから、旅人の為に街道沿いに植えられるのだそうよ。この山にもあって良かつたわ」

「ああ、枝でハンモックをつくるんだ……」

光一は周囲のインヨーの木を見回した。

「でも、編むつひざひつて？」

ミツルは面倒くそな顔をちらりとし、

「後で教えるわ。ちょっと休んでからね」

とだけ言って畠を閉じてしばらく横たわっていた。

休憩して少し元気の出たミツルは、光一にも命じてインヨーの木にたくさんの三つ編みを作り始めた。上から垂れ下がつてくる柳のよつな枝の出来るだけ高いところから、三本選んで一本の縄を編む。

この縄が4本の木に十数本程度出来ると、今度はそれらを網状に組んで行く。こればかりは光一は説明を聞いてもよく理解できなかつた。「網くらい自分で作れなくて、どうして暮らしていけたわけ？」と疲労が滲み出るのか、ちくちく嫌味を言いながらミツルは、

インヨーの枝を編んだもので緑色の網を作っていく。

最後は、一本のインヨーの木からそれぞれの枝で作った網を結び合させて一人分のハンモックの完成だった。

日の暮れる直前に出来上がったインヨーの木のハンモックはなかなか快適だった。夕飯はないが、今日はこれで休むことができる。明日はお昼ごろまでに次の街に付くだろう。これからは食料を携帯するようこしたら、街道の途中で夜になつても野宿していけば、ミシルの足でも旅を続けていけるだろう。光一は安堵の息を吐いた。そして、じりん、とハンモックの中で寝返りを打つ。

でも、何のための旅なんだろ。

安心すると、次はこんな考えが浮かぶ。そつやつて野宿も交えながら皇都に行つてもただ元の世界に戻るだけなのだ。こんな旅、ちつとも楽しい目的なんか無い。

「私、いいこと思いついたの。コーキチ」

光一の気持ちを見透かしたようにミシルが声を掛けってきた。

「私達、仕事をすればいいのよ。だいたい、旅の費用を帝国府に払つてもらう」とばかり考えていたから、私達も皇都を目指すしかなつて思つてただけで。でも、自分で自分たちの旅費を貯つとなると話は違つてくるわ

「……ああ、まあそうだね。でも、どうやって……。よそ者の僕達が仕事を見つけるってどうすれば……」

ミシルは溜息を一つついて、光一に噛んで含めるまつて聴いていて

やる。

「とりあえず、宿代ね。泊まらせてもうう代わりに宿の仕事を手伝います、つていつたらそれだけ長く泊まれると思うわ。そして大きな街についたら、他の仕事だって何とでも見つかるわよ。その気にさえなれば」

「……でも、そんなことできるかな……働くなんて……」

光一はまだ高校1年生だ。将来の就職についてもなにも考えていないし、アルバイトの経験すらない。働く、なんてずうつと未来の話だと思っていた光一は、ミツルの思いがけない提案に戸惑っていた。それがミツルを、少し違った風に苛立たせてしまったようだった。

「んもう。生きていくつて働くことでしょ。別的人生を生きたいって思った時から私はちゃんと働くつもりだったわよ」

「…………」

「『一イチは？ まさかいつまでも遊んで暮らせるとでも思つてたの？』

光一はむつとした。

「そういうわけじゃないよ。でも、君と違つて僕は突然この世界にやつてきて、人生の選択肢が増えたばっかりなんだよ。まだ、考えが煮詰まつてないところだつて一杯あるんだ。その大きい街つたつて僕にはどんなところだ想像つかないし」

「とりあえず、『尖塔の街』は『煉瓦の街』よりずっと大きいと思うわ。『石の国』って産業が盛んなんですもの」

「あのさ。順を踏んで説明してくれないかな。君がそんなだから僕だつて困るんだよ。その『尖塔の街』つていうのは、『石の国』の

首都か何かなわけ？」

「……そつよ。『尖塔の街』は『石の国』の首都」

ミツルも不機嫌そうな声で答えた。でも間を置いてこう言った。

「……悪かったわ。貴方にとつてはわからないことだらけなのよね。これからはちゃんと説明する」

ミツルはフェアな性格をしている、と光一は思った。人にもすばしば意見するけど、自分自身にもちゃんと筋を通す。本当に強くて賢い女の子だ。そう光一は感心しているのに、自分の口からは「そうしてくれよ」という素つ氣無い一言だけしか出なかつた。光一はそんな自分を情けなく思いながら、ミツルに背を向け目を瞑つた。

二人は街から街へ旅を続けていった。宿に泊まれそうなときは宿で、街道の途中で日が暮れたときには、街道の傍、インヨーの木の群生している所で夜を過ごした。

疲れのせいで、二人は、最初にインヨーの木で眠つた時のような小さな言い争いを何度も繰り返した。もつとも二人ともまだ若くて、一晩寝ればかなり疲れは取れる。それにミツルはさっぱりした性格で、光一はおとなしい性格だから、次の日今まで怒りを持ち越すことはなかつた。

一人とも、今この世界で仲間は相手しかいないので。諍いの翌日には、一人とも歩きながら冷静に前日の諍いを思い返して、互いが互いの長所短所を把握するようになつていつた。

ミツルは物知りで頭も切れるけど、ずっと一人で育ってきたから人に説明するのが苦手なんだ。光一はそう思つて、分からな

いところは自分から積極的に質問するようになった。

光一は、物事を決めるのにグズグズして苛立たしいところもあるけれど、彼にとつてこつちは異世界なんだから仕方ない。それに私の優れたところはちやあんと誉めてくれるし、坂が苦手な私に合わせてくれてるし ミツルはそう思つて、光一の目から事態はどう見えるのか配慮しながら説明をするよつになつた。

半月ほどの掛かつて、彼らは一人で越える最後の山の峰に出た。その峰からは、ラクロウ河のほとりに大きく広がる市街地が見下ろせた。その町並みからは何本もの尖塔が、空に向かつて突き出されていた。

## 尖塔の街

一人は「尖塔の街」へ入つていった。石畳にも建物にも、この国の山で採れるらしい明るい灰色の石が使われている。初夏の眩い日差しを柔らかに跳ね返しながら、広々とした道路に堂々たる建物がどこまでも並んでいた。

「石の国」は産業が盛んな商人の国で、どの街にも最低一箇所は商工会議所のような建物があり、その建物には高い塔がついていて、日時計や鐘、風見鶏などが取り付けられる。そんな知識をこれまでに一人は得ていた。

ただ、今まで旅して來た街はそんな建物は街に一つか二つしかなかつた。けれども、この「尖塔の街」にはそんな建物がいくつもあるようで、高い塔があちらにもこちらにも聳え立っている。塔の先端には意匠を凝らした金の飾りがとりつけられており、夏の初めの明るい日差しを受けてキラリと輝いている。

街の中心部に向かうにつれて、一人は建物ばかり見ているわけには行かなくなつた。街のところどころに広場になつてている場所があり、そこにはぎつしりと露店が並んで市が開かれていた。行きかう人々の数も半端ではない。光一が思わず東京の雑踏を思い起こすほどの混みようだつた。

一人は何とか、這い上がるよつにして人の海から逃れた。そこは、空を高々と衝き上げる尖塔を持ち、堂々たるファサードでもつて広場に君臨する巨大な建物の基壇の階段だつた。そこに一人はやや呆然といった態で腰を掛け、しばらく喘ぐよつて息をしていた。

「すごい……私、こんなにたくさんの人人が集まっているの見たこと無い」

「僕のいた世界では、これくらい人が混むことはあるんだけど……。こんなにいろんな人がいるのは僕も初めてだよ」

光一はまだ海外に旅行したことは無い。でも、どこにいってもこうまで多彩な人々が群れ集う様は見られないんじゃないかと思う。

背の高さも、肌の色もさまざまの人たちがあちこちにいる。顔立ちも今まで河沿いの旅で見かけた彫りの深い顔立ちとは別に、東洋人っぽい顔立ちもいるし、中東の人にも似た、彫よりも目の大ささが印象的な華やかな顔立ちの人々もいる。身に着けている衣装もそれぞれで、布を巻きつけて引きずるような人もいれば、立体的な服を最小限だけ身につけぎりぎり歩き回っている人もいる。色彩も、鮮やかな原色に染め上げたものもあれば、素朴な草木染ふうのものもあり、と様々だった。

「ほんと……いろんな人がいるわねえ……」

とミツルが未だぼうっとした様子で呟くのに合わせるかのように、二人の目の前にグラスが一つ差し出された。一人は驚いてそれを持つ手の主を見た。気の良さそうな男が一人に笑いかけていた。

「やあ。『海から来た者』が皇都に向かう途中かい？」

この男も「石の国」の人間よりもやや肌が色が濃く、それがまた彼の陽気な風体に似合っていた。この建物の傍で水瓶いくつか並べて、中の飲み物を売っている露店のおやじらしい。店のほうはその妻らしい女が店先で客の相手をしている。

「ゴレン酒はいかがかね？」

「ほ、僕達未成年……ええと子供だからお酒は……」

光一は慌てて手と頭を横に振つたが、男は大らかに笑つた。

「酒つたつて果実酒だよ。それに子供だつていつのは見てわからあ。水でたつふり薄めてるから酔いやしないよ。飲みなよ。人に当たつてへとへとなんだろうからさ。どうせお代は帝国府もちだろ？」

「貰おうよ」

ミツルは光一にそつ声を掛け、光一の返事を待ちもせず男からグラスを受け取ると一気に飲み干した。

「ああ美味しい。僕、本当に喉が渴いてたんだ」

光一も、軽く頭を下げてグラスを手に取り口をつけた。自分が思うより自分の身体はずつと水分を欲していたようで、彼はその酸味のある冷たい果実酒を「ぐくり」ぐくりと飲み込んでたちまちグラスを空けてしまった。

「美味しい。僕もすぐ喉が渴いてたみたいで」

「自分の喉が渴いてるかどうか分からぬほど呆気に取られてたんだな。どれ、俺もちょっと一休みだ」

そういつて彼も階段に腰を掛けた。どうも店番を代わつてもらい、自分が休憩する話し相手に光一とミツルを選んだよつだった。

「どうだい。凄い活気だろ？？」

男は誇らしげに言つ。

「今日は何かのお祭りとか特別な日なんですか？」

光一が訊くと男は愉快そうに首を振った。

「違う違う。毎日だよ。毎日これくらい賑わってるんだよ、この街は。何しろここには帝国中の人と物が集まっているんだからな」

男は胸を張る。ミツルが探りを入れるように訊ねた。

「皇都よりこっちの方が集まる人が多いんですか？」

「皇都？ 皇都は政の街だからなあ。俺も一遍だけしか行ったことはねえ。鬱蒼とした森に囲まれて、都に続く道もその暗い森の中に一本きりだ。街だって、皇宮をはじめ貴族の邸宅、あちこちの王族の仮宮、それから帝国府の建物がほとんどで、市なんてねえ。そこにお住まいの方々に物品を献上する出入りの商人はいるのかもしかんが、こっちは『く普通の商売人だからねえ』

彼はしばらく遠い目をしていたが、眼前の市に目を戻すとまた大きな笑みを浮かべて言った。

「政の中心は皇都だが、商いの中心はここ『尖塔の街』だよ。見るよ、この市の大きさといったら。言つとくけどここだけじゃないぜ。この街中の百近い広場全部でこんな大きな市が毎日立つていいんだ」

「それは凄いですね」

光一が素直に驚くのに、男はますます機嫌を良くする。

「な？ お前さん達もここで一休みしたら、他の市も回つてみるといいや。河沿いの街からはもちろん、河から離れた辺境の王国からも隊商を組んでいろいろな品が届くんだぜ」

「……隊商、ですか？」

男の言葉にミシルが素早く反応する。

「その隊商って、旅をしてここまで来てるってことですよね？」  
「え？ ああ、そうだよ。まあ帝国では原則旅は禁止だからな。いちこち皇都へ行つて帝国府から免許状を貰つてこなきやなんねえ。免許を貰うにあたつてはいろいろ言われんだけどな。例えば、旅は一年おきに限るとかなんとか」

でもな、と男はにんまり笑う。

「商人てのは、余所を出し抜いてナンボなんだよ。そんなお上の決まりなんかいちこち守つてなんかいやしねえよ」

「自由、なんだ……」

ミシルが呟く。どこか夢見るような調子で。

「おひよ。商人ってのは自由でなくちゃできねえよ」

男がやうやく答えるのに、光一が勢いこんで言った。

「あのう、僕……。これだけ活氣のある街つて初めて見るんです。多分あちらの世界にもこんなにいろいろな人や物が集まる街なんてないと思つとです」  
「やうだらうとも、そつだひつとも」

男は大きく首を縦に振つて頷く。

「だから……」の街に元々泊まつていろいろ見て回りたいんですけど

「…………」

「もちろん、宿代は働いて払います」

ミツルが急いで光一の言葉に付け加えた。

「おひ。そりやそりや。見なきや損でもんだよ、この街は。お上の田を盗んで客を連泊させてくれるもぐりの宿屋だつて、一杯ある。どれ、一番近い宿屋まで案内してやるよ」

そう言って立ち上がった男の背中の後ろで、二人は目を見合せた。

やつたね！

よくやつたわ！

一人は微笑んで頷きあつた。

「本当、光一の言つとおつ……」

「ううとうとした聲音でミツルが言つ。けれども光一の方なんかこれっぽっちも見はしない。宿に荷物を置くとすぐ、宿を飛び出るようにしてミツルが行きたいと言つたのがこの通りだった。

ミツルは宿の亭主に聞いたのだ、ねえ、服屋さんが集まつてるとこにうつてないかな」と。確かにここは、日本で言うところのファッショնストリートのようだつた。通りに面する大きな窓の中に、人形を立たせて店の商品を着せている。世界が違つても商売の遣り方は似通つてしまふものなのか、そんな店が立ち並ぶ様は、日本の都会とあまり変わらないようにさえ見えた。

そしてミツルはあつあつちの店のショウウイングを覗いてはうつとりと見入つてゐるのだった。

「ここは首都なんだもの。国境の街のあのワンピースより素敵な服がいつぱい……」

「あのせ、ミツル。君は今男の子の格好なんだからさ、あまりしげしげと見入らないほうがいいんじゃないの?」

「あら」

ミツルは光一に振り向きもせず答える。

「さつきから男の人だつて女物の服を眺めているじゃない」「まあね……」

背の低いお爺さんと背の高い若い男が連れ立つて女物の服を見ている。光一達が気付いたときからずっとこの通りにいて、光一達同様あちこちの店の前で立ち止まる。今は、ミツルの見入っている店の隣の店に立っていた。

「やあ

光一が彼らに視線をやつたかやらないか、そんな瞬間に向こうの若い男の方が話しかけてきた。鼻が高くて眼窩が窪んでいる。しきしその顔立ちは端正に整っている上、どこか眼光鋭く猛禽類を思われる風貌だった。ただ光一はこのような顔を見たことがあるような気がした。これほど美男子ではなかつたけれど。

声を掛けられて、ミツルも驚いてその二人連れを見た。その猛禽類はミツルと視線が合つと、心底愉しげな笑みを浮かべた。光一の心に小さな敵愾心が生まれる。 なんだ、こいつ。

「『海から来た者』を連れて買い物かい？」

明らかに光一よりミツルに興味がある様子で彼が話しかける。

「僕達、この街が珍しいから見て回つているんですつ

光一が、「僕達」に力をいれ、あくまでも服だけに关心があるわけじゃないと強調して答えた。だのに猛禽類は光一を一瞥さえしない。

「『僕達』ねえ。ふうん」

猛禽類は相変わらず面白そうにミツルだけを見ている。こいつは

ミツルが女の子だつて見抜いているんじゃないか。光一は思つた。

「ミツル、行こう。他にも見たいものが一杯あるんだ。早く行かな  
いと日が暮れてしまうよ」

光一はミツルの腕をとつて立ち去ろうとした。ミツルも得体の知  
れない他人に目を付けられたからには仕方ないと、服を見るのを諦  
めた。黙つて離れていく光一とミツルの背に、猛禽類は声を掛けた。

「よい旅を！ ミツルお嬢さん」

一人はぎくりと振り返る。猛禽類は愉しそうに笑つたまま、二人  
に手を挙げてみせ、老人に促されて通りの向こうへ歩き出していく  
た。

「…………ばれちゃつたみたいだね…………」

「でも、何も訊かなかつたわ。この街にはいろんな人が集まつてい  
るもの。男の子の格好の女の子がいても大したことないのかもしれ  
ないわ」

「そんなことないよつ。アイツ、君のことしげしげと見つめていた  
じゃないか。ニヤニヤ笑いながらさ」

「そお？ 感じのいい人に見えたけど？」

「でも、アイツ……」

光一がなおも言い募らうとするのを、ミツルが制した。そして通りの先を指差して言つた。

「見て、コーライチ。あそこに辻の巫女がいる……」

一人がいる通りが、三プロックほど先で大通りと交差している。

その通りと通りの交差する真ん中に人だかりがしている。馬車や行き交う人々も、その人だかりを丁寧によけていた。そしてその人だかりの中心にあの黒ずくめの巫女がいたのだ。

黒マントを頭からすっぽり被った皺だらけの老婆が、彼女の前に跪く男に何か言つて聞かせている。男は頭を垂れて老婆の話に聞き入り、時折深く頷く。そして最後に深々と一礼すると神妙な顔で立ち上がり、雑踏の中に消えていった。

「ほら、私の読んだ本によると、辻の巫女というのはあやつて道の交差する地点に立つて、行きかう人々に予言を告げるのが本業なのよ」

「へえ……」

ミツルと光一は辻に向かつて歩を進める。

「来たね

」

辻の巫女が光一達にそう声を掛けた。二人は驚く。辻に近付いているとはいっても、辻の巫女からはまだずっと離れている。それに巫女は人に取り囮まれており、二人の姿は取り巻く人々の間から、ちら見え隠れしているようにしか見えまい。それなのに、この目の悪そうな老婆は早々と二人の存在に気付いた。

それに、この声。巫女はもごもごと口をうごめかせているだけなのに、耳元ではつきりその声を聞くことができる。

「どうどう来たんだね。この辻に……」

二人は辻の巫女の許に駆け寄った。人ごみを搔き分け、巫女のま

正面に立つ。ミツルは硬い表情で巫女を見下ろしている。光一は、周囲の人々の批判めいた視線を気にして膝を付いた。そしてミツルの服の裾を引っ張つて彼女にも跪くよう促す。

「お前はもう辻に来て、曲がり道を曲がってしまった。もつ後へは引くことはかなわぬ」

巫女は椅子に腰掛けたまま、跪くミツルの顔を痛ましげに見つめながらそう言つた。皺だらけの顔の表情にも、白く濁つた瞳に今は緊迫した色が浮かんでいる。

「前に会つた時、私のことを『戻る』として『ここ』で言いましたよね」

ミツルも巫女の氣迫に負けまいとするかのよつ、首をすうつと立てて答えた。巫女はゆつくつとしたまばたきを、額きに代えた。

「でも。その時も、今も私は『出て行く』つもりであるのは変わらないわ」

傲然、とも言えるミツルの態度だった。けれども、巫女は氣を悪くするどころか少しだけ眉を開いて言つた。

「よく誤解されるのじゃがね。道とこうのはただ在るのではないのじゃよ。その道を歩む者の心のありよつに合わせて、道は現れ出づるのじ……」

ミツルはワインレッドの瞳を強く光らせ、口の端を上げて見せた。

「私は、道とこうのは自分で切り開いていくものだと思つてゐる。だ

からここまでこれたのよ。これからだつて、そつするわ。ええ、そ  
うしてみせる

「どうかその強さを正しく使っておくれ。良き友人の諫言を聞きな  
がり……」

「」で辻の巫女は視線を光一に向けた。娘を託す母親のような  
そつ、あの浜辺の村で娘を見送ったマイアのような表情が、彼女  
の顔にあつた。光一は居住まいを正す。

「どうかこの者を助けてやつておくれ。この娘が自分を見失わない  
よう」

「はい……」

光一は真面目な顔で答えた。隣でミツルが心外そうな顔をしてい  
る。巫女は再びミツルに顔を向けて言った。

「どうか良い旅を。ミツル、そしてコーライチよ  
「有難う」

赤く目を光らせながら、野生の豹のよくなしなやかさで彼女は立  
ち上がつた。光一も慌てて立ち上がり巫女にペコリとお辞儀した。  
そして二人は、彼らの後ろで巫女の託宣を待つていた者に場所を譲  
つて、その場を離れた。

日が傾き、夕刻が近付くとしていた。ミツルと光一は市が立ち  
並んでいた広場のベンチに黙つて座つてている。一人とも背もたれに  
身を預けて、だるそうに市の名残を眺めていた。

早々と店じまいをして姿を消した店もあれば、どんどん値を下げ

て肉や魚などの生鮮品を売り切つてしまおうとまだ残つていい露店もあつた。広場はそんな店々を巡つて夕食の材料を揃えようと/orする少し手前のこの時刻は、その日一日の心身の疲れがもつとも昂じ、底の抜けたような寂しさを招く時刻でもある。

ミツルは黙つている。光一も口を開くのが億劫だつた。日の暮れる少し手前のこの時刻は、その日一日の心身の疲れがもつとも昂じ、底の抜けたような寂しさを招く時刻でもある。

市の後の「ゴミ」を漁りにきた野犬が遠く吼えた。光一はそれに眉を寄せてミツルを見たが、ミツルはぼうつとあらぬ方を眺めている。彼女がわざわざから無言なのに光一は落ち着かない気持ちとなり、話題を作つて話しかけてみた。

「ねえ。あの模様つてなんなんだ？」「

「模様？」

「ほら、あちこちの建物の壁に似たような感じの模様が描いてある

だろ？？」

「ああ」

ミツルは光一の指差す先を見ると、背もたれから身を起こして答えた。張りのある声だった。

「文字よ。これがこちらの世界の文字」

「へええ。じゃあ、壁に書いてあるのは……」

ミツルは一つ一つ指で指し示しながら読み上げる。

「あれは『肉屋』。あれは『金物屋』。一軒あいて隣が『ハイゼット』、おそらく店の名前なんじゃないかな。下に細かい字で書いて

ある、『空き家・空き部屋お知らせ下さい』って。住居の貸し借りを仲介する店なんじやないかしらね』

「 」「名答」

ミツルと光一はベンチから跳ねるように立ち上がって後ろを振り返つた。後ろに、あの猛禽類のような若い男と老人が立っていた。

「貴方たち、誰？」

さすがに今回はミツルも警戒している。何者だ、お前たちは。

「文字が読めて、男の格好をしている君の方こそ何者なのか、僕は知りたいなあ」

若い男は、軽やかに笑いながら返事ではなく問いを寄越した。

「私が文字を読めるのが判るつて言つなら、貴方も文字が読めるつてことでしょう？ おかしいわ。何者なの、貴方」「どうして我等が字を読めるのか」

「」で若い男は言葉を切つた。彼のどび色の瞳にからかいの色が浮かぶ。

「帝国軍の将官が字も読めないようでは困るだらつ ？」

軍人。光一が全く相対したことのない職業だ。だが、ミツルは即座に否定した。

「貴方が帝国軍の将官？ 兵卒じゃなくて将官だというの？ まさ

か。貴方はどう見たつて『浜辺の者』じゃない。『浜辺の者』なんかが、神聖なる帝国軍の将官になれるわけないわ」

ああ、そうか。光一は納得した。どこかで見た顔立ちだと思ったら、そうだ、『砂浜の村』の住人達がこんな顔立ちをしていたのだ。

「浜辺の者」という被差別身分を暴露されても、彼は動じることなく飄々と受け流した。

「でも、してくれた方がいるのだからしかたあるまい?」

隣の老人が苦々しげに口を開いた。

「我々は『彷徨える皇軍』なのじゃよ。あちこち旅をしている内に、こんな者まで拾う羽目になつてしまつたんじゃ」

老人は心底忌々しげに男を見るが、男はこいつの視線には慣れっこなようだった。

「『彷徨える皇軍』って何?」

ミツルが眉間に皺を寄せて訊く。それを見て光一も緊張する。ミツルはこの世界でもかなりの物知りだ。体験したことは少なくとも、本で読んだ知識は大量にある。そのミツルが知らないその「彷徨える皇軍」というのは一体なんのだろう。

「ああ、これは喜ばしい」

若い男が芝居がかつた様子で手を叩いた。パンパンパン。

「爺さん、爺さんの昔話を聞いてくれる者が現れたぞ！」

ミツルが胡乱な者を見る目で彼を見た。彼は相変わらず軽やかな笑みをミツルに向ける。

「文字が読めて、男装してまで旅をしてきたお嬢さん。それなのに『彷徨える皇軍』を知らないのは困ったものだ。きっと我が帝国の我儘皇女のことにも知らないんだろうなあ」

「知らないわ。でも、それで誰が何故困るわけ？」

苛立ちを募らせるミツルをおかしそうに眺めて彼は囁く。

「我々も。我々は君たちを雇い入れようとしているからだよ。雇用主の事情は飲み込んでおいて貰わなくちゃ」

「はあ？ 私が貴方達に雇われる、ですって？ そんなこと、いつ誰が決めたのよ？」

「今、この僕が、決めた」

「……っ」

ミツルが怒鳴り声をあげる直前、絶妙なタイミングで彼は続けた。

「もちろん、この爺さんの話を聞いた後に君たちが決めればいいんだよ」

ミツルは、この男の相手をするのが馬鹿馬鹿しいと思つていてこと露にして、老人の方に顔を向けた。老人が説明する。

「何せ、我等は皇都に戻れず彷徨わねばならんのでな。ぼろぼろと兵士が辞めてしまつて、人手不足なんじやよ」

「僕達、『海から来た者』と女の子なんですよ？ 兵士になんてと

てもなれません」

光一が慌てて首をふる。

「戦力なら間に合っている。むしろ優秀な軍人だからこそこの皇軍に集っているのさ。問題は兵糧係なんかをしてくれる人間だ。こんな爺さん一人じゃいろいろ困ることが多くてね」

若い男は相変わらず立て板に水を流すように話を進める。

「まあ、夕食でも一緒にいかが？ そして、この爺さんの昔話を聞いてやつておくれよ。君たちにとつても悪い話じゃないと思つよ」

ミツルと光一は顔を見合せた。あの砂浜からこの街までの旅の間に、何も言わなくても相手の行動が互いに分かるほど二人の呼吸は合つよになっていた。ミツルが一人分の答えを返す。

「とりあえず、お話は聞かせてもらつわ」

「良かつたな、爺さん。今夜はたっぷり昔話を聞いてもらえるぞ」

若い男は、こう言って老人の背を叩くと、快活な様子で歩き始めた。ミツルと光一は彼らの後に従つた。

この若い男こそ、ミツルの そして光一の運命の道を大きく変えてしまつたことに、その時の人まだ気が付いていなかつた。

ポツーン。

天から水滴が、泉にしたたり落ちてきた。

泉の傍に佇む少女は、それがやつてきた天を見上げる。この泉は、それを中心に建造された巨大なドームに覆われており、昼の今でも薄暗い。彼女の見上げる天は、この円蓋の頭頂部に丸く穿たれた天窓の形に切り取られている。

彼女は円く光る天から泉の水面へと再び視線を落とした。先程の滴が空から天窓を通してこの泉にしたたり落ちてきたのを、再現するかのように。

少女の隣で、滴の音の余韻が消えるまでじっと耳を済ませていた初老の男が彼女に語りかける。

「リザ。この一滴は命の滴だよ。いやつて人はこの世に生を受けるのだ。この滴はこの泉から湧き出る水とともに河となつて海まで流れしていく。そして、しかるべき土地で母親の胎内に宿るのだ。この一滴一滴すなわち帝国の領民一人一人を守ること。これが皇帝の神聖な役目なのだよ」

この初老の男はリヴィアイエ帝国十七代皇帝であり、名をスヘイドという。隣に立つ十三歳の少女は彼の一人娘、リザ皇女だ。

ドームの中には、この一人の他にも数十人の人影があった。皆、ゆつたりとした裾の長い純白の衣装に身を包み、同じく純白の頭巾

を被つてゐる。彼らはここで働く神官達だ。今もあちこちを拭き清めたり、調べ物をしたり記録をつけたり忙しく立ち働いてゐる。それなのに、彼らは物音といつものを作たてず、このドームは重苦しいほどの静寂に包まれてゐる。

初代皇帝が立つずっと以前、太古の頃からこの白装束の神官達がこの泉を守つてきたといわれてゐる。

この泉は銀製の水盤から湧き出るよつに設えられてゐるが、この水盤には今は使われることのない古い文様や文字が刻まれてあり、この水盤が遙か古に作られたことを示してゐる。

それなのにこの水盤は、つい昨日出来上がつたばかりのよつに、薄暗いドームの中でも少ない光を撥ね返してうつすらと輝いてゐる。それだけ、毎日毎日それはそれは丹精込めて神官達が磨いてゐるからだらう。

この銀の水盤から溢れた泉の水は、一筋の流れとなつてこのドームから外へと流れ出す。森を抜け、険しい山脈の谷間を走り、その間に雨水や雪解け水を集めて次第に太い河となる。この河はそのまま、延々と広がる丘陵地や平原の中をゆつたりと流れ、ついに海にそそぐ。この世界に河はこの一つしかなく、海はこの河よつて生まれされ、そのためこの泉は「海の源流」と呼ばれる。

この世界を生きる命は、一滴のしづくとなつて天からこの泉にしだり落ちてくる。一滴、そしてまた一滴。この生命の滴は河の流れに乗つて流域に運ばれ、女の腹に宿る。この世界では、人はそうやって誕生する。ゆえにこの河は古の言葉で「命の道」を意味する「ラクロウ」河といつ名を持つてゐる。

そして魂がこの世界での生命を終えたなら、その魂が宿っていた体を焼き清め、遺灰を河に流して、今度は海に還さなければならぬ。魂は再び河の流れに乗つて海に着く。広い海で魚の姿を取りながら、魂はしばしの休息を得る。そして定められた時がくれば魂は空に昇り、再び「生命の滴」として「海の源流」へしたたり落ちてくる。

天から降つてきた命を出迎える場所。地にあつて、魂を海まで運ぶラクロウ河の出発点。「海の源流」はかよつに神聖な場所なのだ。

人の世界の始まりから、神官達はこの「海の源流」を護つてきたとされている。それがいつのことなのか暦の上で確定することはできない。何しろそれは暦というものが誕生する前のことなのだから。

しかし、スヘイドの先祖初代皇帝トウオグルが、泉を護る神官達から皇帝位を献上されたことはしつかり記憶され、今でも帝国中でその日は祭日となつている。

この英雄の登場以来の歴史は、それ以前の静寂を打ち消すかのように、騒々しきほどの記録と伝承に彩られている。

いまや帝国は繁栄を謳歌し、太古の静寂を残すのはこの聖地「海の源流」を覆う円蓋の中だけだった。

「お父様、早くあちらに行きませること?」

リザ皇女が父帝を見上げその袖を引いた。ここが神聖で重要な場所、神官を除けば皇帝とその近親者しか立ち入ることを許されない場所であることは、彼女も重々承知している。

けれども彼女はここがあまり好きではない。飾りのない、石造りの建物特有の冷気が籠つた静かなこの空間は、神聖といつよりも何だか寂しいところだとしか思えなかつた。

「もうそろそろ式典の頃ではありますか？」

今日は外宮の大会堂で大きな式典が開かれる。少女はこんなもの寂しいところから早く立ち去りたかった。その式典が少女にとって少々退屈なものであつたとしても。

「そうだね」

父帝はそう言つてやつと泉から離れた。そして「ああ、行こつか」と娘に手を差し出す。私はそんな子供じゃありませんわ。少女は少しばかり口を尖らせるけれど、父帝の手を握つた。ずっと昔、彼女が幼女だった頃から、あのような形で母親を失つた頃から、この父娘は文字通り手を取り合つて過ごしてきただから。

皇帝と皇女は「海の源流」を出て、そして外宮へと向かつた。

一人は「海の源流」を覆うドームを出て、ドームから延びる小さな水の流れに沿つて歩きだした。この流れの両岸には白く輝く玉石が敷き詰められており、水はその中央をちらちらと走つてい。玉砂利が昼の光を柔らかく反射し、辺りに人影はない。明るさと静けさに包まれたこの場所もまた神聖な雰囲気を醸し出している。

もつとも玉砂利だけでは皇帝や神官までもが歩きにくいため、左右両岸に大人二人分程の幅の舗道が設けられている。左岸のそれは皇帝用、右岸のそれは神官用と考えてよい。左岸には皇帝とその家族のための宮殿、右岸には神官達の住まいがあるからである。

この皇帝と神官の住まい場所を内宮と呼び、壁を隔てて下流に広がる建物を外宮と呼ぶ。外宮のつち、小川の右岸には帝国府のさまざまな用向きのための建築物が群れをなしている。皇帝の宮殿と同じ左岸の方には極めて巨大な石造り会堂が聳え立ちその威容を誇っている。

この会堂は単に巨大なだけでなく、外壁も内装もそしてその天井も壮麗な意匠が施されている。特に今日のような大きな祭典では、その上に花やら布やらをふんだんに用いて特別華やかに装飾される。この世のものならぬ絢爛たる空間にあつて、会堂内の群集はすっかり興奮していることだろう。

一方。内宮を抜けて外宮の会堂に向かう皇帝とその愛娘は、時折言葉を交わすだけで、静かに歩を進めるだけだった。

歩きながらスヘイドは、今回の式典の中心となる男のことを考え

ていた。彼の可愛い娘にとつて災いの種となりかねない男のことを。

ゲル Gand 将軍。

彼はスヘイドの従兄弟にあたる。

皇帝家の傍系に生まれた者は、男子は帝国軍に入り、女子は帝国内の王国の王家に嫁ぐ。それが絶対の不文律となっていた。そうやつて傍系皇族達は皇帝家嫡流を守護してきた。

ゲル Gand 一家、すなわち先帝の弟宮一家もこれに倣つた。ゲル Gand の父と一人の兄、そしてゲル Gand 自身も軍に入り、一人いた姉は西方の国の王妃となつている。

傍系男子が帝国軍に入隊する時は、「將軍」の地位を「えられる。ただし、古代はともかく、時代が下るにつれてその地位は次第に名目的なものになつていった。「ごく最近まで、彼らは將軍位を与えられたからといって特に武芸に習熟することもなければ、実際に軍を率いることもなかつた。皇宮の側に居邸を構え、度々皇宮に参内するものがその日常だつた。

しかしながら、ゲル Gand の一人の兄は帝国軍の遠征中に蛮族に襲撃されて命を落とした。

先帝の御世の後半から、先帝及びその政策を受け継いだ現皇帝と、皇帝家に反発する領内の諸王国との間に緊張が高まつてゐる。また、その間隙を狙つた蛮族の襲来も増えた。

帝国軍の遠征には、辺境の蛮族を駆逐するだけでなく、皇族が各國の王を訪ねて親交を深めるという目的もある。ゲル Gand の兄二

人は、後者の目的で、武人としての鍛錬を積まぬまま諸王を訪問する旅に出た。そしてそのまま還ることがなかつたのだった。

息子二人は戦死し、娘は遠い異国に嫁ぎ、ゲルガンドの両親に残つたのは彼一人だった。両親はなんとかこの息子は死なずに済むようとに願つた。そのために彼に武芸を磨かせることにしたのだった。蛮族と戦うことがあれば自分の力で勝ち残ることができるようになると。

両親の計らいはゲルガンド本人にとつても嬉しかつたようだつた。彼は幼い頃から、窮屈な服を着てしきたりに煩い皇宮に上がることよりも、近習の子供たちと外で伸び伸び走り回つて遊ぶ方がよっぽど好きだつたからだ。

彼は武芸の鍛錬に励みたちまち腕を上げた。実戦を積んで用兵術にも長じるよくなつた。いまや優れた将軍としてゲルガンドの名声は日増しに高まるばかりだ。

災いの種が芽吹こうとしている。

このほど、軍を退役してひつそり暮らしていたゲルガンドの父親が亡くなつた。これでリザ皇女以外に皇統を継ぐことが出来るものはゲルガンド一人になつた。

父上の懸念は正しかつた。

スヘイドはゲルガンドが誕生したときのことを思い出す。将来は将軍となるその赤子が、トウオグルを思わせる黒い髪と黒い瞳を持つていると聞いたとき、スヘイドの父先帝シャルメルは断じた。「あの子は我らにとつて災いの種だ」と。傍系の三男にそこまで警戒

しなくともよいのでは、と思つ一方でスヘイドもまた禍々しい不安を覚えたのを記憶している。

リザが産まれた時、この娘も黒い瞳と黒い髪を持っていることに安堵したのだ。しかし、それでも「災いの種」は消えはしなかつた。それどころか二人の兄は死に、自分自身の力で人望を集めて、あの男はリザに次いで皇位継承権第一位にまで近付いている。

リザには出自に問題がある。皇帝家に対して不満を持つ貴族や諸国王も多い。スヘイドは一層顔を険しくして考える。リザの皇位継承や今の皇帝家に反発する者達の中には、ゲル Gand を皇帝にしようとする動きがある。ゲル Gand にそういう誘いがあるという情報は、彼の側に放つてある間諜から聞いている。今のことろゲル Gand にその気はないようだが……。

封じ込めなければ。

ゲル Gand が將軍として頭角を現し始めた頃、先帝はまだ存命中だった。そしてゲル Gand の扱い方をスヘイドに教えていた。

「軍功を讃えてやれ。それも多くの者の前で華やかに、だ。そして見せ付けてやるのだ。彼は非常に優秀な しかしながら一介の軍人に過ぎないことを」

帝国の威容を示す壮麗な大会堂。どんな式典が誰の為に開かれようとの建造物の主は皇帝だ。

皇帝の玉座は会堂の最も奥に、十数段の階段を登つたところにある。ここがこの会堂の主役なのだ。

会堂の身廊は堅固な石造りゆえに大きな窓は取れない。飾りをかねた無数の燭光で照らされるけれども、ほの暗さを完全に払拭することはできない。しかし、身廊の突き当たりに広がる玉座の周囲は違う。玉座の天井は巨大な円蓋となつており、壁と円蓋の間にぐるりと窓が並んでいる。そのため円蓋の下の玉座は外の明るい日の光に包まれることになる。

それだけでも身廊から見上げる群衆に玉座は眩しく感じられよう。更に、玉座は金、銀、白金、数多の宝石で飾られている。その煌びやかさは、まるで玉座自体が輝きを放つているように見える。

この天上と地上の光に包まれた空間には、皇帝と皇太子以外に何人も上ることは出来ない。そこに続く階段に足を掛けることすら許されない。

確かに今日の式典はゲルガンドのためのものだ。

今日は、今までの軍功と高まる名声に応え、皇帝スヘイドがゲルガンドに「元帥」の地位を与える口であった。これで彼は他の将軍たちを総括する軍人の筆頭の地位に立つことになる。

しかし　。今日ゲルガンドがこの華麗なる大会堂であることと言えば　スヘイドとリザの座る場所からずつと低い、床の上に跪くことだ。彼は地に膝をつき、高みに座る皇帝から位を「賜る」。彼は、皇帝の御用人が皇帝の代理で彼に手渡す任命状と徽章とを、額より上にかけ恭しく押し頂かなければならぬ。

そう、スヘイドはあくまで彼に位を「くれてやる」立場であり、ゲルガンドはそれを「頂戴する」立場なのだ。

この式典は、ゲル Gand を単純に讃える者達の心情を満たしてやると同時に、彼が、いかに皇族と雖もただの軍人であることを示すためのものなのだ。

この式典の中で、群衆はこの自分とゲル Gand の間に存在する身分の差をその目で再確認することだろう。この式典が華やかに執り行われれば執り行われるほど、より一層玉座の莊厳さが際立ち、そこに座る者とその下に跪く者との越え難い差が、視覚を通じて彼らの脳裏に刻み込まれることだろう。

皇帝スヘイドとリザ皇女が、内宮と外宮との境に近付くにつれ、大会堂が威風堂々たる姿を現し始める。

リザもその中で行われる式典について思いを巡らせていたらしく。彼女はふと父親に言った。

「そういえば、お父様。私ゲル Gand 将軍に会つのは初めてですわ

スヘイドは微かに苦笑して答える。

「いや。そなたが幼い頃には何度か会つてはいるよ。けれどもそなたは小さすぎて覚えていないだろうね」

リザ皇女はそれ以上ゲル Gand 将軍について尋ねなかつた。これまでも何度か周囲の者達に彼について訊ねたことはあつたが、何故か皆一様に彼の話題を避けたがつっていた。

どんな方なのかしら。

リザは少しだけそんな風に思つた。けれどもそれは長続きせず、

頭の中で思考の焦点はまた別の中に移つていった。

今日のような特別な式典には、特別な装飾がなされる。彼女の好きなタペストリーもずらりと並べられて居ることだろ。

また、あの絵を見る事ができるのね。

リザとスヘイドは手を繋いで静かに外廊への開かれた門へ歩いていた。

## 典礼のタペストリー

太い石柱が並んでいる。大人が四、五人手を広げてようやく囲めるほどに太い石柱。それらが奥の空間に向かつて一列に並んでいた。

天を仰ぐようにして見上げると、各々の石柱の先は地上からはるか高いところで何本かに枝分かれしている。そしてその枝は各々弧を描いて、他の列柱の先から同様に枝分かれしてきた曲線と出会い。この曲線の出会いによって生まれた尖頭アーチが列を成す石柱に合わせて規則正しく交差しており、この建物の天井に幾何学的な美しさを生み出している。

この列柱の間を、リザ皇女は父帝の横で傲然と言えるほど堂々と歩いて行く。この巨大な身廊は三層の側廊を備えており、その隅々まで群集がびっしりと詰め掛けている。その中央を、彼らに一瞥もくれることなく、彼女はくいっと首を持ち上げて歩を進めていく。会堂の奥を、自分と父親だけが登ることの出来る階段の上を真っ直ぐ見つめながら。

リザもスヘイドも、先ほど控え室で身に着けたばかりの純白の衣装を纏っている。その白さは、身廊の入り口から玉座まで一直線に引かれた真紅の毛氈の上にあって、そくそくと輝く。先帝の頃から皇帝の礼装は白と定められた。皇帝の神聖さを表徴するためである。

スヘイドの衣は、「海の源流」で立ち働く神官のゆつたりした衣装とよく似た形をしていた。けれども神官の用いるものとは違つて、一面に金糸銀糸の細かい刺繡が施された上に、細かな宝玉も縫い付けられており、実に豪華なものだつた。

リザ皇女の衣装も皇帝に準じて白いもので、そしてより一層華やかだつた。首が高く、手の甲まで被う袖がつき、裾が背後に長々と延びる真っ白なドレス。高貴な女性の肌がなるべく人目に触れぬ様に考えられたものだが、その分ふんだんに飾ることができる。

ドレスの腰から下は一段重ねで、上のスカート部分は光沢のある白絹と繊細なレース地とが交互に接ぎ合わされている。ほつそりとした胸には、粒の揃つた真珠で文様が描かれ、袖はふんわりとした薄絹の上に細い銀糸で緻密な刺繡が施されている。そして、首元には帝国内で最も大きな金剛石のブローチが留められ、薄暗い堂内の全ての光を集めたかのように燐然と光っている。

「まつ……」

皇帝親娘、分けても皇女の豪奢な衣装に群衆の中から声にならない息が洩れる。

この式典に参列できるのは貴族階級に限られており、皆思い思ひに精一杯着飾つていた。しかしながらどんなに着飾つても、彼らの中の誰も、あのような神々しい格好はできない。一つには、先帝の御世に皇帝以外は白を着てはならないという命が下され、自分たちが白の衣装を着ることができないせいもある。ただ、仮に自分たちが白い衣を着ようとしたとしても、あれほど華麗な風に揃えることなどできはしないだろ？

やはり皇帝とは我々とは違うのだ。

群衆は、先帝と現皇帝がその効果を狙つたとおりに、この煌々しい純白の衣装に皇帝位の神聖さを感じ取つていたのだった。

いいえ。それでもやつぱり敵はいる。

群衆の中から上がる感嘆の溜息を耳にしてもなお、リザは氣を緩めない。この会堂を埋め尽くす者達の中には、これほど皇帝家の威光を見せ付けられてもなお、この自分自身には冷たい視線を向ける者達がいる。自分はそれを知つてこる。

負けてなるものですか。

母親の身分が低い。そんな理由で自分を帝位に相応しくないと考える者達。

私はそんな者達に屈したりなんかしない。

以前、別の式典で、いつもやつて参列者の中を玉座に向かつて歩いてこると、聞こえよがしに囁いた者がいた。

「あら。あの姫君は本当にあの母親によく似てこること。でも、母親の方は田を伏せてもつと謙虚に歩いていたものだけだ」

暗にリザにも、分をわきまえろ、と言わんばかりのあの声。それが今再び自分の耳にもれやかれたよつた気がしてリザは一層険しい田で前方を見据える。

私は皇女よ。神聖にして穢れ無き皇帝位に就くことが出来るのはこの私だけなのよ。

現に光はすぐ田の前にある。薄暗い身廊が尽きそこから先は、玉座とその隣のリザの為の席が並べられた壇上へと、十数段の階段が

伸びているだけだ。ここから先、天井は大きな円蓋となる。そのドームがせり上がるふもとにある窓から日の光が燦燦と降り注ぐ。

リザは一層誇らしげに階に足を乗せる。これが許されるのは皇帝スヘイドとリザの二人だけ。彼女は一段一段を踏みしめ、眩しいほど豪華に飾られた自分のための席に近付き、殊更ゆつたりとした仕種で腰を下ろした。

同じく玉座に座った皇帝がリザとともに、高みからたっぷり群集を見下ろしてから、おもむろに左手を挙げて彼らに座ることを許した。

皇帝の片手の動き一つでぞろぞろ椅子に座り始める群衆。リザは背筋を伸ばして椅子に納まつたまま、その群れを冷ややかに見下ろしていた。

式典は神官達の執り行う、今となつてはその行為が何を意味するのかわからない、形式的な清めの儀式の数々から始まつた。それから、諸王国からの使い達が順番に、皇帝への讃辞と帝国の繁栄への祝辞を述べ続ける。ゲルガンドの登場までは暫く時間がかかりそうだつた。

リザはもう、自分の靴よりも下で這い蹲つている彼らを見るのに飽きてしまつた。それに、父帝も自分も、彼らからどんなに莊重な美辞麗句を並べ立てられようが何の反応もしてやる必要はないのだ。

彼女はこの大会堂に何枚も吊り下げられた、壮大なタペストリーを眺め始めた。これらは余程大きな式典でなければ御庫から取り出されることはない。故に、随分昔に織られたものでさえ色褪せない

まま鮮やかに、その絵柄に込められた物語を見る者に語りかける。リザはこれらタペストリーの絵を見るのがとても好きだった。

これらのタペストリーは一枚だとこの帝国に起じた重要な事が綴られている。これを順に眺めていけば、太古の世界から今に至るまでの帝国の歴史を辿ることになる。

一枚目。この絵は抽象的とも言えるほどシンプルな構図である。濃紺の夜空。その夜空に浮かぶかのように、白雪を戴く急峻な峰が連なっている。そのふもとに鬱蒼とした森が茂り、その中央に銀に輝く水盤が置かれている。この水盤から、タペストリーの下辺に向けて水が流れ出している。流れは、緑の濃淡で織り出された丘陵地を抜け、褐色の糸で紡がれた平地を蛇行しつつ、夜空を映した濃紺の海へと注ぐ。

この絵に織り込まれている水盤は、先程までリザが田にしていたあの水盤である。この絵は「海の源流」を中心にして、この世界の縮図を示しているのだ。タペストリーの中では唯一、人物の登場しないこの静謐な絵を見るたび、リザは肅然とした気持ちになる。

自分はこの世界の中央に立ち、その源を守護する皇帝になるのだ。そう思うとリザの心は誇らしさで一杯になる。母このこの世界に身も心も踏みにじられてしまつたけれど、自分は違う。自分のこの身は、この世界に唯一絶対の尊き存在なのだ。彼女はこの自負と矜持を糧に今まで育ってきたのだった。

しかしながら、単に子供でいられた時期を過ぎようとするにつれて、自分の心に暗く翳る部分が生まれ、しだいに大きくなっていることにもリザは気がついている。

古の御世はともかく現代となつては、皇帝は「海の源流」の傍から離れることを許されない。よほど変事が起こらぬ限り、自分は一生皇宮から一歩も外に出ることはないだろう。

### 退屈な繪。

皇女として決して口に出してはならない感想を、彼女はごく浅い溜息として吐き出した。

「海の源流」のある『森の国』は、白く輝く急峻な嶺々と黒々とした深い森に囲まれ守られている。リザはこれ以外の風景を見たことがない。毎日毎日皇宮から見えるのは黒い森と白い嶺だけ。そして一生このまま、これと異なる風景を目にすることはない。

彼女は胸に湧き起しつゝくる苛立ちに近い感情を再びひつそり溜息に乗せた。そして救いを求めるかのように次の絵に視線を移した。

一枚目。リザはタペストリーの中でもこの絵が最も好きだ。初めて見た頃からこの絵を見るたび胸がときめいた。そして今ではどこか焦がれる思いでこの絵を愛している。

絵の中央に、黒い髪に黒い瞳を持つ美しい青年が、豪華な衣装を纏つて毅然と立っている。その足元には、今と全く変わらぬ白装束姿の神官達が額づいている。

この絵の凜々しい青年は彼女の先祖、初代皇帝トウオグルである。彼が現れる前は、人々は黒い森の中にいくつかの部族に分かれて暮らしていたという。彼らを纏め上げたのがこのトウオグルであった。彼はそうして「森の国」の主となつた。しかし彼が英雄であるのは単に国を纏めて王になつたからだけではない。

神官達はトウオグルの強さと、そしてその心が正しいことを認めた。だから彼らはトウオグルとその子孫に、「海の源流」を守護すべき神聖なる皇帝位を授けたのだった。

「海の源流」の守護者であるということは、「河の信仰」の守護者であるということでもある。ラクロウ川の流域では、人の生死について共通の神話が伝えられている。生命は天から「海の源流」に滴り落ち、死んだ者の魂は遺骸を河に流すことで海に運ばれ、そこで魚の形をとつて暫く過ごす。そしてその魂に定められた時がくれば天に昇り、そして再び「海の源流」に降つてくるのだ、と。

ラクロウ河の流域には、「森の国」の下流に、河沿いの交易で栄えた港町が連合してうまれた「石の国」がある。その更に下流には河口の港で富を蓄積した王が、海沿いの広範な地域を支配下に置いて成立した「土の国」とがあった。この両国では「河の信仰」は唯一の信仰であり、そして生活の一部といえるほど馴染み深いものだつた。

「海の源流」を守る神官達がトウオグルに皇帝位を授けたということは、皇帝が「河の信仰」を共にする「石の国」「土の国」を支配する正当な根拠となつた。この絵においてトウオグルが古地図河を中心に「石の国」と「土の国」の領土を描いているを踏みしめているのはこのことに拠る。

もつともリザにはそんなことに関心はない。彼女が生まれるずっと前から、帝国はこの一国だけでなくもつと多くの国々に版図を広げていた。「河の信仰」を信じる者達の上に君臨すること、彼女にとっては自明のことだ。

リザはそれなりに聰明な少女だ。帝国に宿る命、その全て守らねばならない皇帝の責務の重さを理解していた。自分は父の名誉のためにも、そして何より母の名誉のためにも立派な皇帝にならなければならぬ。けれど。

一枚目のタペストリーを見ていて感じた暗い感情が再びリザの中に湧いてくる。皇帝の仕事なんて単調なものだ。皇宮より一步も外へ出ず、ただ「海の源流」の傍に居て、神官達の言つがままその祭祀に加わる。古式ゆかしい祀りの儀式 現代を生きる少女にはつまらない儀式が皇帝の本業。それがない日は帝国中のあちこちから難しい話が持ち込まれ、その解決に忙しい。領民達は、皇帝にその生命の旅路を守られている癖に、文句ばかり言つてい。

生命の流れを守る皇帝の責務はあまりに重く、そして単調で、めつたことでは賞賛されない。それなのに、そんな立場になるしか自分の人生に選択肢はない。

苛立ちを振り切るよう、彼女は画中のトゥオグルを見つめた。

ずっと前に父帝に訊ねたことがある。「お父様はどうして皇帝の重責に耐えることが出来になつたの?」と。スヘイドはじめらしく考え込んだ後、「それはお前の母がいたからだよ」と答えた。

スヘイドと、リザの母ペイリンの恋は、主に皇宮で働く侍女たちを中心に今でも盛んに語られる。運命に引き裂かれたものの、互いに互いを想い合う美しい恋物語。自分の両親のこの昔話を、幼い頃から今に至るまでリザは侍女たちにせがんだものだ。

リザは勉学にも相応に真面目に取り組んだが、自分の時間には父だけでなく古の、あるいは異国の恋物語を読んだり聞いたりする

のを好んだ。

十三歳の少女はそうして夢想するようになる。いつか私にも両親のような素敵な恋人が現れるかもしない。そう、このトウオグルのような、美しくて逞しくて頼りになりそうな。そうすれば自分の人生は特別なものになる。むしろそんな方が現れなければ、自分の重苦しく退屈な人生には何の見返りもえられない。そんなことは納得いかない。リザはそんな気がしていた。

スヘイドは、横に座る愛娘が、今日もまたトウオグル帝の似姿に見とれていることに気がついていた。娘にとつてこのタペストリー中のトウオグル帝は未来の恋人だ。ふざけながらもこの聖祖を「私の憧れの君」と呼んでいるのも知っている。

しかし。スヘイドは暗い目をして考える。この娘には真実を隠している。本当は、恋というものは夢見がちな娘が思うほど常に美しいものではないのだ。

いや。彼は僅かに口を引き結ぶ。その真実は、自分自身思い出しあくもないことだし、まだ幼さの残る娘に聞かせる話ではない。娘はまだ十三歳なのだ。絵の中の美青年に憧れる、そんな恋に恋する少女の時間を、父は大切にしてやりたかった。

三枚目。一枚目のトウオグル帝の麗しい姿を十分堪能してからリザはこの絵に視線を向ける。そして、美しく整った眉を顰めた。

そこには残虐な戦闘の様子が画面いっぱいに描かれていた。騎馬に跨り甲冑をつけた美々しい皇帝軍の兵士が、みすぼらしい装備の敵兵の首を掻き切っている。地には、身体のあちこちから血を垂れ流す醜い人間達が横たわっている。背景の建物には全て火が放たれ、

赤い炎が舞い上がっている。

「Jの戦闘は、皇帝軍が「森の国」を囲む山脈を越え、「石の国」、「土の国」に攻め込んだ時のものだと伝えられている。けれどもおかしいわ、トリザは首を傾げた。

彼女が最近学んだ歴史との絵とは随分違つ。トウオグル帝は、古来『海の源流』を護つてきた神官によつて皇帝位を授けられた。この神聖な皇帝の出現を「石の国」「土の国」は喜んで迎え入れた。彼女に帝国史を教える教官はそつ脱説してゐた。

教官は言つたものだ。

「そりやあ、中には抵抗した者もいたかもしません

しかしながら、と彼は続けた。

「しかしながら皇帝の位は神聖なものです。『河の信仰』を共にする者なら喜んで皇帝を迎えたに違ひありません。現に帝国の配下にあつてこれらは平和と繁栄を享受してゐます。皇帝は帝国中の領民から敬われてゐるの」「ざいます」

それならこの絵は間違つてゐる。後でお父様に作り直すべきだつて言つておひつ。皇女は小さく頷いた。

六枚目。Jの絵を見て皇女は機嫌を直す。一代目の皇帝、ドゥルガン帝が一人のそれなりに立派な衣を身に着けた者達を従えるように立つてゐる。これはそれぞれ「石の国」と「土の国」の王で、この絵はJの一つのH国が第一代皇帝ドゥルガン帝の御世に帝国の配下におさまたことを示してゐる。

背景では木が茂り、麦や葡萄をはじめ様々な作物が豊かに実り、地に生えた牧草を羊や牛がゆつたりと食んでいる。これは帝国の配下に入つて繁栄が得られたことを示し、帝国の支配の正当性を示しているのだ。

七枚目。皇女の口に微笑みが浮かぶ。七枚目以降は帝国が版図を拡大する度に製作される。どの絵も構図はほぼ同じだつた。帝国に帰順した国の王が跪き、時の皇帝にその国の名産品を献上している。

皇女にとつては信じられないことに、河から離れた地域には、生命が河と海と空を巡ることを知らない者達がいるのだといふ。なんて愚かなのでしよう。皇女は呆れる。そんな蛮族達の中には「死」をやたら恐れる者もいるとか。「死」なんて単に魂が海に還り、しばらく魚として暮らして再び現世に生まれ変わるまでの一段階に過ぎないのに。

けれども真実つて浸透していくのだわ。河から離れた地域にもこうやつて、魂の生まれ変わりを信じる者が増えたんですもの。皇女はタペストリーに描かれる珍しい品物を楽しみ始める。

確かに帝国は武力だけでその版図を広げたわけではなかつた。「河の信仰」は人の魂の生まれ変わりを説く。この信仰はラクロウ河から離れた地域にももたらされ、この点で多くの人々の心をひきつけた。

支配のきつかけが軍事力によるものでも、やがてその地に「河の信仰」が広まると領民達の帝国の支配に対する心理的な拒絶感は薄らいでいった。さらには、帝国の侵攻以前に「河の信仰」が伝えられその国の王族までがこの信仰に帰依した結果、向こうの方から帝

国に帰順を望む国もあった。

ただし、事実はこのタペストリーに描かれているほど単純ではない。生まれ変わりを約束する「河の信仰」は確かに多くの人々を魅了していつたけれども、その土地その土地で語り継がれていた土着の信仰と軋轢を起こすことも多かつた。また、信仰を改め帝国に帰順したかのように見える国でも、それは単に帝国軍の戦力をあてにしているだけで、辺境の蛮族から自国を護るためにただの見せ掛けにすぎない場合もあつた。

しかし、皇女にタペストリーの背後の真実まで見通す力はない。七枚目以降のタペストリーを皇女はただ無邪気に楽しんでいた。皇宫から一步も外に出たことのない皇女は、それらに描かれる珍奇な物品や見たことの無い異国の風景を見るのに夢中となり、時の経つのをしばし忘れていた。

喇叭の金属音が群集のざわめきを制していく。そして、ファンファーレが鳴り終わつてようやく静かになつた会堂に今回の典礼の主役が入つてきた。皇女のお楽しみの時間もおしまいだ。皇女は少し残念な気持ちでタペストリーから視線を下ろし、会堂の身廊をこちらに進んでくる人影を見た。

ゲルガンド将軍は上背があり、遠くドームの真下に座る皇女からもその姿を捉えることができた。引き締まつた体躯を姿勢よく、大またにしかしじこかしなやかな獸のよにゆつくりと彼は近付いてくる。

薄暗い身廊から田の光の射す円蓋の下へ彼は踏み出した。皇女は思わず息を飲む。

濡れたように艶やかな黒い髪。端正でありながら精悍な顔立ち。

そして自信と若さに満ちたその黒い瞳。

「こんな方、私初めて見る。

一瞬そう思つただけで皇女はすぐその考えを否定した。「うん、私はこの方に似た人を知つてゐる。皇女はタペストリーの一枚目をちらと見やり、そしてゲルガンド将軍に目を戻した。

私の憧れの君だわ！

皇女は、典礼の間中熱っぽい目つきで彼の一挙手一投足を見つめ続けている。この日この時から、皇女は幼くも真剣な、それゆえ多くの人間の運命を変えてしまう恋に落ちてしまったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8874v/>

---

水の砂漠の魚たち

2011年12月1日20時32分発行